戦う魔王様!?

かりうむいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦う魔王様！？

【Ｎコード】
Ｎ０６１８Ｚ

【作者名】
かりうむいおん

【あらすじ】
諸々の理由で、勇者一向に紛れ込んだ魔王様。しかしその勇者がアレな人で……。勇者×魔王だけどこんな攻めでいいのか？、なコメディ。一般向けですので性描写が入りそうになると、時間が吹っ飛びます。気楽に楽める話にする予定（未定）ですのでよろしくおねがいします。

追記：すぴぱるにも投稿するかもです。また、ジャンルを恋愛に変更しました

血迷った選択（前書き）

イメージでは昔読んでいたような、少女漫画＋少年漫画＋ＢＬなコメディです。疲れたときに読むと元気になる話を目指す予定です。

一般向けＢＬの方が良いのかなと最近書いていて悩んだので、こちらにも投稿することにしました。

はじめは設定の関係上、ちょった暗めかもしれません。

血迷った選択

「久々の獲物だ、逃がさないぜ！」
「キャ――――！」
悲鳴を上げて逃げ惑う美少年約二名。
　それを追い掛け回す剣を腰に下げた変態。
ちなみに、この変態は勇者である。
「ＨＡＨＡＨＡ、捕まえたぞ！。さあこれから俺と一緒に愛の楽園へ……」
「……レオン、いい加減にしろ！」
そう、カノンは魔法の杖で勇者レオンを殴って気絶させた。
とりあえず、逃げ惑っていた美少年には、すみませんと謝り、勇者レオンを回収していく。
そして、気絶したこのアホ勇者をずるずると引きずりながら宿へと戻る。
この分だと地面との摩擦でまたズボンが破ける事になるだろうが致し方ない。
お金の管理をしているカノンには頭が痛い話だ。
――何故僕がこんな事を……。
幾度となくした自問自答を再び繰り返し、カノンはうんざりする。
答えは決まっている。
それはカノンが勇者レオンの“幼馴染”だからだ。
――やっぱりアレだ。事前の下調べを面倒だったからしなかったのが敗因か。
初めて会った時、結構骨のある奴でこいつなら良いかも、と思ったのに。
なのに、まさかこんな奴だなんて。
幸いカノンの事は“幼馴染”だからだろう、対象外なので口説いたりはしてこ無い。

カノンはフードで顔が見えないようにしているが、本当はきらめくばかりの美少年なので真っ先に口説かれると予想される。
なのにそうならないのは“幼馴染み”フィルターのおかげだ。
そしてそもそも、勇者本人が自分で言っていたのだから、間違いないだろう。
はあとカノンは溜息をつく。
いかんせんこの勇者は弱過ぎる。
というか、美少年やら美少女やら美熟女やら美しき紳士やらを口説く前に剣の練習をしろと。
あの時は、もっと強い勇者だと感じたのに。
とんだ見込み違いだ。
はあと再び溜息をついて、宿の扉を開ける。部屋には勇者の仲間がいるはずだ。
カノンは魔法使いとして彼らの仲間の一員をしている。
ついでにお金の管理も。一番カノンが安心出来るからと、勇者レオンに渡された。
その時カノンは思った。
こいつの安心出来るは絶対信用しないと。
もう一回カノンは溜息をついた。
現在勇者達は魔王を倒す旅に出ている最中だった。
ちなみに、カノンは魔王である。

呻くように頭から血を流し睨みつける勇者。
すでに他の二人の仲間は、瀕死の重症だった。
そんな絶体絶命の勇者を、魔王カノンカースは不敵に見下ろした。
魔物の瞳である金の瞳に宿る冷酷さと傲慢さが見て取れる。死神とも言えそうな黒い衣装に、銀色の長い髪。
恐ろしく整った美しい容姿が、更にかの魔王の恐怖を引き立てていた。
「何だ、お前はこの程度か？」

「まだ……俺はまだやれる！」
勇者はふらつきながらも立とうとして、膝をつく。既に勇者も限界だった。
その様子に魔王は嘲笑う。
「無理をするな、人間。元々人間が我ら魔王に勝とうなど、思いあがりも甚だしいのだ」
「……く、それでも、俺は……勇者として……」
「他にも多くの勇者がいるのだ。お前が倒れた所で代わりは幾らでもいるぞ？」
「……だからといって、ここで……諦めるわけにはいかない！」
そう、最後の力を振り絞るように勇者は剣を振り下ろした。
それを馬鹿にしたように魔王は笑い、結界で防ぐ。
その結界にはじかれて勇者が転がった。再び起き上がろうとするも、既に勇者にはそんな力は残されていなかった。
魔王が勇者の前にかがみ、頭を掴む。勇者の口から血が零れた。赤い血。
魔王は魔物としての衝動で、勇者の口を伝う血を舌で舐め取る。
それに僅かに勇者が目を見張り、魔王を凝視する。その様子に、魔王は笑う。
「……なんだ？、頬が赤いぞ？」
「……るさい、一体……何の真似だ！」
「旨そうだったので、舐め取った。それだけだ」
「！」
「非常に美味だったぞ？、お前の血は」
魔王は艶かしく勇者に微笑み、そのままもう一度その血を舐め取った。
そしてゆっくりと顔を離し、右手で勇者の頭を掴んだ。
それが痛かったのだろう、勇者が苦悶の声を上げた。
「さて、お前の記憶を少し読み、書き換えさせて貰う。なに、全てではない。それに、ちょっとした拍子に元に戻ってしまうものだか

ら、それほど恐れるものではない」
「止めろ……やめ……」
必死に勇者が声を搾り出す。けれどそれに魔王は薄く笑みを浮かべるのみ。
「今のお前の力では勝てないと分かっているだろう?。なに、次に目を覚ました時には、この事は忘れている。そして僕の事を仲間の一人だと思っている事だろう。ふむ、お前の幼馴染に魔物とのハーフが……しかも死亡している?」
「やめ……違……」
「ではその者に僕は成り代わろう。短い間であろうが、よろしく」
「やめろ――――――!」
そう叫んで、勇者は意識を失った。
その間に魔王は記憶の書き換え、および治療を仲間ともどもしてやる。
そして、瞳の色を、片方だけ金のままもう片方を青色に変化させて、魔法使いのような出で立ちに魔王は変装する。
元々、昔の話だが人のふりをしていたことがあるのだ。造作も無い。
ローブのフードをかぶり、顔が良く見えないようにする。あまり容姿をさらすとろくな事にならないのだから。
一通り変装が終わり一息つく。
そして倒れ込んでいる勇者を冷たく一瞥して、
「せいぜい利用させてもらうとしよう」
そう、魔王はにやりと笑ったのだった。
後になって思えば、それこそが運のつきだった。

血迷った選択（後書き）

つづきます

お前はすでに絆されている

「あ、カノンちゃんお帰りなさい」
柔らかいピンク色の髪の、美少女のような少年イオが何やら弓使いの大人しい青い髪の青年トランの背中に薬を塗っていた。
「トラン、頼まれれば僕が治療したのに」
「ははは、トランは魔物が嫌いだからね」
「僕は魔物扱いか」
実際そうなんだけどね、とカノンは心の中で舌を出す。
そこで、イオがカノンが引きずっている物体Xに目をやる。
「あれ、レオンまた誰かをナンパしてたの？」
「ナンパなんて可愛いものなのか、僕は時々疑問に思う」
「まず直球で、やらせて下さい、だからね。そんな事を言ったら普通逃げるよね」
「何であんな……」
「カノンちゃんは昔から一緒なんでしょう？。知らないの？」
「……ある日突然ああなってしまいまして」
「きっと、カノンちゃんが振ったのがいけないんだよ」
「あのね、僕はそういう対象にならないってレオンも言っていただろう！。まったく……どうしてすぐに恋バナにするかな……レオン、逃げるな、正座」
「はい」
大人しく正座するレオンに、カノンはお説教を始める。
勇者として、というか人としての、最低限守るべき常識として考えられるものをくどくどと耳にたこが出来るほど何度も話さなければならない。
何が悲しくて魔王が人間に説教せねばならないのだ。
「……わかったか？」
「わかった」

輝くばかりの眩しいレオンの顔を見て、カノンは理解した。
こいつ、絶対に分かっていない。
そこで、レノンの顔が近づいてきて、カノンの銀髪に触れる。
一瞬どきりとカノンはしてしまう。
いや、だって、レオンもあんなふざけたりしなければ、意外に整った顔をしていて、綺麗な金髪で、空を映した瞳で……って、いや、アホ勇者だ、アホ勇者。
そもそも人間ごときに魅了されるなど魔王として風上にも置けない。
しかも、この軽薄な奴に。
「ほら、鳥の羽が付いていた」
レオンの手には、黒い鳥の羽があった。
「あ、ああ……取ってくれてありがとう」
「いや、見えたから。でもカノンは付けたままでも良かったかも」
「何でだよ！」
「だって黒がカノンには似合うから」
無邪気にレオンが言うその言葉に、カノンはぎくりとする。と、
「駄目だよレオン。黒が似合うなんて、黒は死と夜を想像させる。かの魔王もそうだしね。好きな子にはそんな事言っちゃ駄目だよ？」
「うん、分かった。でもカノンは“幼馴染”だから」
「そっか、恋愛対象にならないかぁ」
にまにまとこちらを見るイオ。
何だ、何が言いたいんだ。
それに、どうして僕が少しがっかりしたような気持ちにならないといけないんだ。
わけが分からない。
「……それより、近くで魔物が暴れているそうだから、それで賞金稼ぎをしないか？。でないとしばらく宿に泊まれない所か、朝食が水だけに……」
「さすがに植物みたいに、光合成して生きていけないよな……。カ

ノンも果物食べられなくなるし。今の時期、よく取れる果物があんまり無いんだよな……」
一応相槌を打つが、カノンは魔王というか魔族なので肉食に近い雑食である。
そのレオンの幼馴染の魔物とのハーフとやらは、魔族の中でも特に珍しい種族で、基本果物しか食べない魔物である。しかもその見目麗しさから、人にも魔物にも狙われるという可哀想な人型の種族だ。
もっともかの魔族よりも更に際立った美しい容姿をしているのが魔王を含めた高位の魔族だったりするのだが、それはおいて置いて。
「わかった。大切な“幼馴染”を飢えさせる訳にはいかないから、俺、がんばる！」
「そ、そうか、分かった。じゃあ、僕は依頼を受けてくる申請をしてくるから……」
そうほんのり頬を赤くして、カノンは部屋から小走りで出て行く。
どうも調子が狂う。
ここ一週間ほど一緒に居ただけなのに、その度に、カノンはレオンの奇行に悩まされつつ、気が付けば突っ込み役をやっていた。
「えー、でもカノンちゃん、レオンのそういう役所だからね」
そうにこやかに笑うイオに、どう考えても記憶操作に失敗しているとカノンは気付いた。
だが今更記憶操作を再びするのも難しい。下手に齟齬が生じて、全てが台無しになっては元も子もない。
そもそも、何故にこんなイオという踊り子と、猟師のトランが仲間なのだ。
もっとこう戦いに強そうな者を仲間にするものではないのか。
ちなみに仲間になった馴れ初めを聞くと、酒場で意気投合してこうなったらしい。
「俺、実力でのし上るタイプだから！」
良い笑顔でレオンに言われて、そういうつてが無いんだなとカノ

ンは理解した。
なので他に仲間を誘おうにも、レオンの奇行はすぐに有名になってしまい、そんな奇特な人間はいない。
もっと良識のある仲間がカノンは欲しかった。
ボケ役になりたい。でないと疲れる。
本当にレオンは変な奴だ。なのに、カノンがついもっと仲間を探してしまったりするのは、“幼馴染”という理由からだろうがレオンがカノンにとびきり優しいからだ。それにいい奴だし。
ああもう、自分は魔王だというのにどうしてこんな……。
カノンは、小さくやってられないと呟いて、その思いを振り払うかのように走り始めた。

カノンが部屋から出て行った後。
「それで、レオンちゃんは本当の所、カノンちゃんの事をどう思っているの？」
「どう料理してやろうかなと」
「……レオン、まだカノンちゃんを完全に捕まえていないでしょ？とらぬ狸の皮算用、って言うじゃない？」
「確実に捕まえるつもりだから問題ない」
そうにっとレオンは笑ってみせる。
他の奴らを口説いているのも、全部カノンに気にかけてもらいがたいためだ、と言ったらカノンはどんな顔をするだろう？。
「信じてもらえないんじゃない？」
「否が応でも信じざる負えない状況にもって行けばいい。俺はカノンが欲しい」
「……カノンは止めた方がいい」
「トラン、幾ら魔族が嫌いだからって……」
「あれは駄目だ。レオンも諦めた方がいい。辛い思いをする前に」
そんなトランに、レオンは、ははっと笑った。
「大丈夫だよ、あいつの事は本当に昔から知っている。だから大丈

夫なんだ」
それ以上、トランは何も言わなかった。納得していないなとレオンは思いつつ、さてと窓から顔を出す。
通りかかる人を物色してから、にやりと笑った。
「そこのお姉さん、ぜひ俺と……」
そこまでしかレオンは言えなかった。何処からともなく、兎の置物が落ちてきてレオンは気絶する。
それを見て、イオが思い出したかのように手をぽんと打った。
「そういえば、カノンちゃんがレオン対策魔法を設置したとか言っていた気がする」
いい嫁さんだねー、とイオは気楽そうに笑うも、すぐ傍のトランは元々の寡黙な性格もあるが黙ったままだった。

お前はすでに絆されている（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

次回更新は未定ですがよろしくお願いします

森のきのこはご用心

何故ここにはキノコの魔物しかいないのだろう。
先ほどから延々と現れては腰?、を揺らしながら踊るキノコを切ったり、ナイフやら矢で突き刺したり、火炎系の魔法でバーベキューにしたわけだが。
「よし、これでしばらく食事には困らないな！」
レオンが山盛りになった焼かれたキノコの前で高笑いする。
確かにこれだけの量があれば当分食事に困らないだろうとカノンは思う。
但し、連続してキノコを食べる事に耐えられれば、の話だが。
そこでイオが残念というように首をふる。
「残念だけどそうもいかないんだ。それ全部毒キノコだから」
「え？　本当に？」
「だよね、トラン」
「ああ、その類の魔物は食べられない。確か養殖しようとして間違えて毒キノコの魔物を量産して、手に負えなくなったから放置したとか何とか」
そんな事で魔物が増えたのかと思うとかノンは頭が痛くなる。
ちなみにカノンは魔王なので魔物が増えるのは喜ばしいはずなのだが、現在魔王である事を隠しているので力が使えない。
故に襲われる。
それを差し引いても、どうしてこんなに嬉しくないんだろう。
「じゃあどうした方が良い？　毒物を放置していいのか？」
「……勇者としての力で浄化すれば終わりです」
「そういえば、俺、勇者だったな。忘れていた……カノン、嘘です。だから杖を構えないで」
仕方が無いといったようにレオンが剣を構えて、そこでふとトランが何かを思い出したように言った。

「赤いキノコだけは、結構な高値で売れる。猟師の間では隠れた小遣いになる」
「じゃあ分けるか。宿代やら食費やら出るかな？」
ちょっとレオンは嬉しそうだ。そこで、ふとイオが気付いたように、
「トラン、これなんで高く売れるの？　毒でしょう？」
「毒と薬は表裏一体。ただそれは、“大人”が嗜む物だ」
“大人”という下りにレオンが反応したので、カノンは杖で軽くレオンの背中をつついて牽制する。
しかしそんなレオンの行動など気付かず、イオが更にその意味を問いかける。
「……つまり？」
そこでトランがこぶしを握って言い切った。
「自分の中にあるエロ願望をひたすらしゃべってしまうという薬だ」
「聞いた事がある……。その薬により、数多のカップルが分かれたという伝説の……」
「ああ、恐ろしい薬だ」
そうトランは額の汗をぬぐう。
カノンは思った。こいつらがレオンについてきた理由が何となく分かった。
似た者だからだ。
となるとカノン自身も彼らに似ているという恐るべき事実が……ないな。
それにそもそもそんな薬、どうでも良いじゃないか。、
「……別に、エロ願望口走るぐらい、いいじゃないか。誰かを傷つけるわけでも無いし」
が、その言葉にレオンがやけに反応した。
「カノンは分かっていない！　いいか、人間の脳内にある妄想が一番エロいんだぞ！」
だからどうした！、とカノンはツッコミ対願望を抑えつつ、そう

熱意を持って力説するレオンに、お前ならそうだろうなとカノンは溜息をついて、
「いや……頭の中にあるものを言葉なり、文字なり、絵なりで表そうとしても、その限界は存在する。そうでなければ言い間違いや聞き間違いは起きないはずだから……」
「うお、珍しくカノンがまともに話してる」
「……さっき散々説教した事を忘れてるみたいだから、もう2ターンぐらいお説教しとこうか」
「ああ、俺の繊細な心がそんなに怒られちゃうと硝子のように砕けちゃう！」
「繊細だったら少しは行動を改めろ！　うっかりこの前胃薬を買おうか迷ったじゃないか！」
胃薬常備の魔王ってどんなだよ、そもそも魔王って偉そうにしてればいいものなはずなのに、どうしてこうなった。
カノンは心の中でむせび泣く。と、
「ちなみに買ったのか？」
レオンがちょっと心配そうにカノンを見る。
心配されて嬉しいと思ってしまったカノンは、すぐさまその諸悪の根源がレオンだと思い出す。
なので少し恨めしそうに一言。
「……残金が」
「ごめんなさい」
「まったく……いっそ、レオンにそのキノコを食べさせて恥ずかしい思いをさせるかな。その方が薬になるだろうか……」
そこでイオが慌てたように口を挟む。
「だめ、カノンちゃん。それだけは絶対止めた方が良い！」
「イオ、でもそろそろレオンにお灸を……」
「もしもカノンちゃん、レオンにエロエロな感じで口説かれたらどうするの！」
「待て、イオ、何故俺が口説くのが罰ゲームになっているんだ？」

「そうだな。危なかった。イオ、ありがとう」
「……おい」
「どういたしまして。いやね、カノンちゃんにパーティ抜けられると本当に戦力的にきついからさ」
「……無視しないで」
「はは、それはどうも。でもイオの短剣の扱いは中々だと思いますよ？」
「……あのー」
「本音を言うと、カノンちゃんの事気に入ってるから、いて欲しいなって」
「わー、嬉しいですねー」
ちなみに記憶操作する前に、カノンはイオをフルボッコにしていたりする。
そんな考えをおくびにも出さず、にっこりとカノンは微笑んだ。
そこで、耐えられなくなったのか、レオンが叫んだ。
「む・し・す・る・な――――――！」
その言葉と同時に、特に大きい踊るキノコの魔物が現れたのだった。

「ふう、何とか倒したな。お？」
レオンの体が薄く光っている。
「これは……レベルアップの予感！」
カノンはこういう時は口に出さなくてもいいのでは無いかと思った。
一応黙って立っているだけで様になる容姿なのに、口を開くとどうして格好が悪くなるのだか。
そこでいつもと違い、白い粉がくるくると回って、
「あ、じゃあアレで。ええ、その技でお願いします」
そうレオンが独り言を呟くと、それは消え去る。
今までに見たことが無いので、カノンは問いかける。

「今の何？」
「ああ、技を覚えたんだ。どれがいいか選択したんだ」
「どんな？」
「うーん、強化系？、かな」
「どうして、？、がつく」
カノンは嫌な予感がしたのだが、そこでレオンがカノンに抱きついた。
「俺ようやくまたレベルアップしたよ、褒めて褒めて！」
「え、いや、あの……」
カノンは突然レオンに抱きつかれて、顔を真っ赤にしてどうしようかとおろおろする。
助けを求めるようにイオとトランを見ると、トランはいつも通りの無表情で、イオはにまにまと笑っているだけで助けるつもりは無いらしい。
「カノン、褒めてくれないのか？」
「……ああ、はいはい、いいこいいこ」
頭を撫ぜてやると、レオンは更に嬉しそうにカノンに抱きついてきた。
それが嬉しいと思う反面、カノンは、これは“幼馴染”に対する好意なのだろうと悲しくなる。
何で僕がこんな思いをしなくちゃならないんだ、これも全部レオンが悪いとカノンは心の中で思ったのだった。

森のきのこはご用心（後書き）

読んでいただきありがとうございました。今日はもう一回更新したい

シリアスは歩いてくる？（１）

宿に戻ってからふとトランが思い出した様に付け加えた。
「そういえばあのキノコ、酒につけて売ったほうが高く売れるんだよな」
そんな訳で手分けして、酒と漬けるための瓶を買いに行ったわけだが。
「酒が売り切れ？」
すぐに任務から脱出しようとするレオンの襟首を掴みながら、カノンは酒屋の親父さんから聞いて首をかしげる。
「……お酒は作るのに時間がかかりますよね？　それがこれから数ヶ月無いって……何故売り切れなのですか？」
「いや、なんでも有名な勇者御一行の戦士が無類の酒好きらしくて、全部買い占めていってね」
「全部買い占めてって……樽の跡を見た限り、２０以上……」
「ちなみに二段に積んであったんだがね……」
「それ、全部一人で飲むのですかね？」
「そう言っていたな」
親父さんとカノンは沈黙する。どう考えても人間の体に入る量じゃない。
「まあ、有名な勇者様達だから、そういう事もあるのだろう。じゃあそろそろ店を閉めるから……もしも五日後でいいなら、隣町から仕入れて数本は用意できるが？」
「あ、いえ、そこまではいいです。ありがとうございます」
「そうかそうか、所でお嬢さんは、ここにいつまで滞在するんだい？」
唐突にお嬢さんといわれてカノンは、目が点になる。
「あの、僕は男なんですが」
その言葉に、親父さんはえっという顔をして慌てたように、

「え？　あ、いやすまない。あまりにも別嬪さんだったもので……最近美少年やら、美少女やらが攫われる事件が多発していてね。その半分は魔族の仕業らしいが……」
「残り半分は？」
「人買いだよ。そういうのは魔族にも貴族にも高く売れるからね。それに最近、そういった美少年やら美少女所か、年をいった人まで声をかける変態勇者が出るそうだから気よつけたほうがいい」
最後の下りはうちの勇者ですとは言えず、カノンは黙って頷いた。
そして、ふと自分が掴んでいたレオンの襟首がやけに軽いことに気付く。
よくみると、服だけになっていた。
「あーいーつーはー」
「さっき、こそこそ上着だけ脱いであっちに行ったから、今から追いかければ間に合うんじゃないかな？」
「教えてくださいよ！」
「いや、何となくこの前、妻に趣味で高い模型を買ったことがばれた時に似ていて、つい」
とりあえずカノンはありがとうございました、と酒屋の親父さんに挨拶して走り出したのだった。
そんなカノンを見ている人影に、カノンは気付きつつも無視したのだった。

「お前のようなのが勇者だと？　笑わせるな！」
ちょっと大き目の通りに人だかり。それと怒声。
カノンは非常に嫌な予感を覚えて、人だかりを覗き込むと、案の定レオンが居た。ついでにイオとトランもいる。
大きい野生的な筋肉質の男、背中に巨大な斧を背負っている。その男が今の言葉を発したのだが、それに対してイオが食って掛かった。
「そっちこそ、そんなヒョロヒョロのにこやかな勇者で大丈夫なん

ですか！」
「お前……ホーリィロウ様に、なんて事を！」
「ふん、レオンの事を馬鹿にする奴は僕が許さない。トランもそうでしょう？」
「ああ、貴方方にとってはレオンは矮小な存在に見えるかもしれないが、これでも我々の大事な勇者です」
　これでも、という言葉に反応したレオンだったが、
「所で魔法使いはいないのか？、やけに美人だという話だが？」
「ここにいますよ！」
　カノンは人だかりを飛び越えて、一番前面にすとんと飛び降りる。そこで、戦士が少し殺気立つ。
「魔物……か？」
「ハーフです。所で僕は途中からですので何があったのか教えていただけますか？」
「そこの勇者が打ちの僧侶をナンパしたんだ」
「ごめんなさい。跡でたっぷり言い聞かせておきますので、許していただけないかなと……」
「許せるか！　見ろ、僧侶の奴が怖がっているじゃないか！」
　指差す先には白装束を纏った、くすんだ銀髪の少年が、彼らの勇者の後ろで顔を赤くしてレオンを見ている。
　その子は、カノンと目が合うときっと睨みつけて、俯いた。
　これはひょっとして？。
「……もしや、僧侶の方はレオンに一目ぼれを……」
「するわけが無いだろう！　あいつが大人しいからって好き放題やって……」
「レオン、あの子に何やった？」
　それにレオンが困ったように、
「いや、道を聞かれただけだが……」
「よくそんな嘘を！」
　憤る戦士を、そこで勇者ホーリィロウが宥めた。

「まあまあ落ち着いて。僕達だって鬼じゃない。その償いをしてもらえればいいさ」
「償い……なるほど、そちらが本来の目的ですか」
「人聞きが悪いな。僕は君に仲間になって欲しいのに」
そう、ホーリィロウがカノンに手を伸ばす。それを人影が遮る。
「レオン？」
「……カノンは俺の“幼馴染”で仲間です。貴方にお渡し出来ません」
「君はそうかもしれないけれど、カノン君か、彼はもしかしたならこっちが良いかもしれないよ？」
「お断りします」
カノンは、ホーリィロウを見て即座に言い切った。
それに、レオンはちょっと驚いたような顔をして微笑んだ。
対するホーリィロウは相変わらず不気味なほどにこやかなままだ。
「これで話は終わりです。それでは……」
そういってカノンの肩に手を回して背を向けるレオン。
肩に手を回された時、必然的にレオンにくっつくような形になり、レオンの体温を少し感じてカノンはどきりとした。
そこで、カノンの腕が引っ張られる。
「僕に触るな！」
とっにカノンは振り払った。目がホーリィロウと合う。
その瞳に宿る不穏な気配に、自然とカノンも挑戦するような好戦的な気配を瞳に宿す。
「……やっぱり君はそういう顔の方が綺麗だね」
「お褒め頂ありがとうございます。それでは僕は失礼します」
「でも、僕達に喧嘩を売って、ただで済むと思っているのかい？」
「そちらが仕掛けてきたのでしょう？」
「さて、何の事だか。……けれど、僕たちが本気を出せばどうなるか分かっているでしょう？　レオン様？」
名前を呼ばれて、レオンが立ち止まり振り返って睨みつける。

「……それで、俺達にどうしろと？」
「カノン君を賭けてゲームをしないかい？」
「生憎だが、カノンを商品にするつもりは無い。カノンは物では無いしね」
レオンが問題外だと言い切る。少し怒っているようだ。
でも、こういう時の顔をカノンは今まで見たことがなかった。
思いのほかしっかりしているというか、頼りになるというか……。
こんな顔で口説かれたら、誰でも一発で落ちるだろうに。
本当にレオンは残念だよなと、人事のようにカノンは思った。
そして、カノンの事を物じゃないからとかまったく、だが本当に仲間思いなレオンにカノンもほんの少しだけ手助けしたくなる。
きっと、ここで敵対するのはレオンにとっても良くないだろう。
だから、
「いいよ、僕が相手になってやる」
「カノン！」
レオンが慌てたように叫ぶ。そして、イオも、
「カノンちゃん、考え直したほうが良い。あいつらの仕掛けてくるゲームってカードゲームなんだけど、今まで殆ど負けたことが無いんだ」
「ふーん。カードゲーム、ね。イカサマしているって事？」
「それは俺を侮辱しているのか？。そんな事せずとも光の神の加護を受けている僕達には、そんなものは必要ない」
そう自信満々に言い切るホーリィロウにカノンはふふと笑った。
それに、カノンは不敵に笑い返す。
「イカサマを見つけたら、貴方の負けですよ？」
「余裕だね。それだけ自信があるのかな？」
「ええ、もちろん」
カノンと心配そうな、イオとレオン。そこでトランが、
「カノンが大丈夫だといっているんだ。何か考えがあるのだろう。今まで旅をしていて、言ったことだけは必ずやる奴だと俺は知って

いる」
その言葉に、イオとレオンが黙る。
「話はまとまったかな？」
微笑みかけるホーリィロウ。
そんな彼がカノンには滑稽で仕方が無い。
今自分が相手にしているのは誰だと思っているのだ？。

シリアスは歩いてくる？（１）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

あと一回今日は更新できるかな？

シリアスは歩いてくる？（2）

「うーん、困ったね。イカサマしたのに負けちゃった」
ホーリィロウが全然困っていないように頬をかく。深刻そうな雰囲気は一切見て取れない。
ちなみに彼の目の前に座っているカノンは、肩透かしを食らっていた。
「……普通に屈折を利用して全てのカードを見ているだけですか？」
「じゃあ君ならどうする？」
楽しそうに聞いてくるホーリィロウに、カノンは笑って肩をすくめる。
「全部同じ柄のカードで神経衰弱、加えて僕が先行かな？」
「……それはゲームにならないよ？」
「僕は安定志向なんです」
仕方ないな、とホーリィロウは微笑んでレオンを見た。
「カノン君は君達のものだよ。今回は僕の負けだね」
「……こういった事はやめて欲しい。特にカノンに……」
「いや、凄く魅力的だからね。“幼馴染”だったっけ」
ふふと獲物を狙うような目でカノンを見た。
そんなカノンをやらないぞというようにレオンは後ろから抱きしめる。
そんな二人の心情などカノンは全然気付かず、本当にレオンは仲間思いだなと思っていた。
二人はカノンの心中など知らず、レオンはホーリィロウを睨みつけて、
「それより、もう金輪際近づくな。でないと悪評立ててやる」
「いや、僧侶を惚れさせた君が悪いだろ。戦士は僧侶の事が片思いなのに」
さらっとホーリィロウがばらして、戦士が噴出した。

「ホーリィロウ様、何故ばらすのですか？」
「いや、レオンに僧侶が一目惚れするとは思わなくて。戦士がレオンに下手に突っかかられても困るし」
「しかし……」
「……いいね」
ぴりりとした殺気が放たれて、戦士が黙る。
その殺気にカノンは酷く反応してしまうが必死で抑えた。
今すぐ狩るか、といった衝動があるものの、レオンに後ろから抱きすくめられる力を強くされて、無理、と思った。
なんだろう、レオンが触れているだけでカノンはどきどきする。
それを悟られる方が怖い。と、
「まったくカノンがいるから、お金の管理しなくて楽なんだから、やらない」
「それが理由か！」
下からパンチを繰り出すも、それをレオンは容易に避ける。
「はははは、遅い、遅いぞ！」
「く、着々と逃げる能力だけ上がってる。だが……」
カノンは暗く笑った。
まさかそんなどうでも良い理由で引き止められているとは思わなかった。
がんばった……いや、それほどがんばったわけではないが、そんな自分が馬鹿みたいだ。
だから、憂さ晴らしさせてもらおう。
「いいだろう、その腐った性根を根本から叩きなおしてやる！」
そう、土煙を上げつつものすごい速度でカノンはレオンを追いかけていったのだった。
後に残った、イオとトランの二人はそれを見送って。
それからくるりとその有名な勇者ご一行にイオは言った。
「ついでですので、その酒樽を一つ譲っていただけませんか？」

「は！　美人な気がする、そこの綺麗なお姉さんて……」
「あらん、わ・た・しの事？」
後ろから見た時には分からなかったが、振り向いた顔は、明らかに男で、美形で無くて、女装しているのはまだ許せるとして、全体からかもし出される雰囲気も含めてレオンは本能的に感じた。
こいつは攻めだと。
「チェ、チェンジで……」
「ふふふふ、最近ここら辺を騒がせている美形の変態勇者さんが引っかかったわ。お持ち帰り～♪」
「やめ、俺は受けじゃない！」
しかしすぐにそのお姉さんのようなお兄さんの肩に担がれてしまう。
「大丈夫、誰もが初めはそう言うのよー。すぐに可愛がってあげるわねー」
「……何故に女言葉」
「馬鹿が引っかかるからよ、うふ」
「いやー、あ、カノン助けて……」
雨の中の子犬のような目で、カノンに助けを求められるが、カノンはにこやかに手を振った。
「ザマーミロ」
「ひ、酷いって……カノンに手を出したら許さないぞ？」
そこで、お姉さんのようなお兄さんがカノンをレオンとは違う方の肩に担ぎ上げる。
敵意が無いの油断したカノンはじたばたと暴れる。
「ちょ、何で僕まで担がれて……」
「あー、物騒なものに手を添えないでね勇者様。心配しなくても依頼が有って……俺はギルドの者だよ」
と、そのお姉さんのようなお兄さんは告げたのだった。
ギルドは、一言で説明すると依頼を受ける場所である。元々キノ

コの魔物を倒したので、依頼達成としてお金を貰いに行く必要がカノンには有ったので手間が省けた。
簡素な応接間に通されて、香りの良い紅茶が出された。
「最近、美人さん達が攫われる事件が多発していてね。あの格好で引っかからないかと試していたのだ」
「……心臓に悪いのでやめてください」
「実は結構君、タイプなんだよね」
レオンがカノンの後ろに隠れた。それはいいとして、
「それで僕達に何を？」
「ああ、魔王の配下、四天王が一人風の王が住まう城があるのだが、そこにいる美人さんを帰して欲しいんだ。一応勇者だし、この位だったら、かの魔族に相手してもらえると思うんだ」
「生きて帰ってこられるレベルだから、ですか」
「評判は散々だが君達のレベルは中々のものだよ。そうすれば、人買いの方の対処に専念できる。本当にここは小さな町なので人手不足なんだ」
はあと溜息をつくお姉さんのようなお兄さんにカノンは頷いた。
「僕達でよければ、ぜひ依頼を受けさせてください」
「助かるよ、依頼料はこれくらいで？」
提示された金額も、中々良い。というか凄くいい。これで当分宿代と食費に困らない。
神様ありがとうとカノンは思った。
ちなみにカノンは魔王である。
「……本当に俺達のレベルでどうにかなるのか？」
レオンが珍しく、真剣な表情で聞き返す。
お姉さんのようなお兄さんは、数回目を瞬かせて、意味深に笑った。
「……大丈夫ですよ。貴方方なら」
「カノン、依頼を断ろう。止めた方がいい」
それにカノンは必死になって首をふる。せっかくのチャンスなの

だ。こんな機会めったに無い。
「嫌だよ、お財布係の僕は、見過ごせないよ」
「いいから止めろ」
「何で急にそんな……僕は受けるよ。ここにサインすればいいんだね」
とレオンの反対を押し切って、サインしてしまう。
「はい、契約成立ですね。もし破ると違約金がかかるので、注意してください」
「……わかった」
レオンが珍しく溜息をつく。
けれど、これはカノンにとって渡りに船なのだ。だから、逃すわけにはいかなかった。

「カノンちゃん、レオンもお帰り。お酒分けてもらって、作っている最中だよ」
「……イオ、一つ聞いてもいい？」
「なぁにー」
「……僕が夢を見ているのかな、樽の半分ぐらいまでお酒が減っているんだけど」
「夢じゃないよー。さっきトランと飲み比べして、僕が勝ったからねー」
「商品に手を出してどうするんだ……そういえば二人がお酒大好きなの忘れてた。はあ、原料だけだと買い叩かれるんだよな……でも他に代わりが無いから、いけるか？」
そう、キノコの山を見詰めてカノンが嘆くと、イオが唐突にカノンに襲い掛かった。
「酒は飲めども飲まれるな……てね」
「や、ちょっ樽ごとは……らめぇ――――！」
カノンは樽に放り込まれた。ざぶんと酒が飛び散る。これでもう酒は使えない。そもそも、

「大丈夫か、カノン？」
笑い転げるイオを尻目に、レオンが様子を見ると、酒に漬かったカノンがレオンを見上げた。
その顔には妖艶な笑みが浮かんでおり、レオンは目を離せなくなる。
次の瞬間、カノンがレオンに手を伸ばして自身に引き寄せてキスをした。
突然の事に慌ててレオンは逃げようとするもカノンは放さない。
何度もちゅっちゅと唇が触れて、レオンは自分の体に力がはいらなくなる。
そしてそのままぐらりと倒れこみ、レオンは意識を失う。
それを見届けたカノンはくすりと笑い、唇を舐める。
「ごちそうさま」
そういつにも増して色香を漂わせながら、カノンは倒れこんだのだった。
ちなみの事の顛末は、酒に全員が酔っていたため記憶に無い。
また、次の日、カノンが何故酒を飲ませた、酒は苦手って言ったのにー、とイオを責めたのは言うまでも無い。

シリアスは歩いてくる？（２）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします。

本人だけが気づかない

翌日の事。
「嘘だ！　そんなの絶対に嘘だ！」
「嘘じゃない。カノンが自分からキスを迫ってきて、こう……」
「～～～～～～～～～（言葉になら無い悲鳴）」
先ほど目を覚ましたカノンは、二日酔いの頭痛を感じながら起き上がって、部屋の惨状を目の当たりにした。
倒れているイオ、トラン、レオン。そして樽に下半身を突っ込んで転がっている自分。
どうしてこうなった。
「ええっと、確か戻ってきたら、イオとトランが酒を半分ほど消費していて、それで作ってたといっていたんだよね」
そうカノンはちらりとキノコの山を見る。減った気配が全然無い。
後で素材だけでも売るかと溜息をつく。
そもそも前からお酒は弱いのだとカノンは皆に言っていたはずなのに。普段イオはいい奴なのに、何故こうも酒癖が悪いんだろう。
そこで、レオンが目を覚ましたらしかった。
そういえば、どうしてレオンが倒れているんだ?。
理由はすぐに分かった。
「ない、ないから。そんな事……」
酔った勢いとはいえ自分からキスするなど……何故覚えていなかった自分、とカノンは思って、覚えていたならどうなのだと疑問に思う。自分の気持ちが良く分からない。
いや、それよりもレオンはどう思っているのだろう。まさかキスなんて。
別に何かの答えを期待しているわけではない。……多分。
なので、試しに聞いてみると、
「カノンの柔らかくて温かい唇がこう、俺の唇に……」

「やーめーろー」
あまりのも生々しく聞こえて、カノンはがくがくとレオンの襟元を握り締めて揺らすも、レオンは笑ったままだ。
「いや、でもまさかカノンに襲われるなんて思わなかった」
「事故だ、不幸な事故だったんだ」
「だよな、俺もカノンは大切な“幼馴染”だからそういう対象に見れないし」
その言葉に、カノンは何故か大きな衝撃を受けた。
いや、確かに“幼馴染”だし仲間だから仕方ないというか、当たり前だが……。
まるで自分が何かを期待しているみたいではないか。
そう考えた途端、カノンは、はうと思った。
無い、これは無い。無い、絶対無いから。無い……でも本当に?。
そこでレオンがやけに上機嫌に、
「そういえば俺のファーストキスはカノンなんだよな」
「なん……だと?」
「昔やっただろ? そうか……覚えていないか」
ちなみに魔王であるカノンのファーストキスは、百歳以上年の離れた子供に奪われずみである。いや、確かにあの時子供に化けてはいたのだが……。
お嫁さんになってよとその後言われて、あの時は慌てて逃げ出した。
何分子供の言う事。そんなに大げさに受け止める必要はなかったのに。
そういえばあの子供も、金髪に空色の瞳をしていたとカノンは思い出す。
すごい偶然だ。
「いや、まさかカノンがそんな風に思っているなんて気付かなかったよ! カモーン、ベイベ」
「……実家に帰らせていただきます」

「あ、嘘です。冗談です……」
引き止めるレオンに、僕も冗談ですよと笑いかける。
まだ目的も果たしていないのに、帰るわけないのだから。

ギルドから依頼を受けた内容をカノンは説明した。
「よし、装備を整えに行こう！」
何故かテンションを高めるレオンに、カノンはジト目でレオンを見た。
「……どうやって？」
「さて、あのキノコでも売るか」
そうやって幾らかお金を得たものの、それも回復の魔法薬代で消えた。
そして、四天王の魔族に攫われるという場所に来たわけだが。
「『美男求む！　人、魔族は問いません。ここから２０ｋｍ』えっと時給は、３０リン……これ、魔物倒すより儲かる？」
「やはりここで普通に働いたほうが生活が……」
「カノンちゃん、カノンちゃん。レオンが本気で働こうか迷っているから止めて」
「うう……この時給……」
「ああ、カノンちゃんまでが大変な事に。トラン！」
「いいんじゃないか？」
「く、魔物嫌いのトランまで……金か、やっぱり世の中金なのか！」
たしかにこれだけあれば、自分も含めて四人でこれでこうで、しかも宿代がかからなくて……て、違う。そうじゃない！。
「レオン、君は勇者として構えていればいい」
危なくカノンは本来の目的を忘れる所だった。
その言葉に、レオンがカノンに抱きついた。
「本当にカノンみたいな“幼馴染”がいて良かった」
「レオン……」
そんなレオンを見て、カノンは罪悪感のようなものを抱く。

利用しているだけなのに、レオンがこんなに嬉しそうだから困るのだ。
本当に困る。
そこで、馬のような魔物に引かれた馬車がやってくる。それはレオン達の前に止まった。
「……勇者御一行ですか？」
その馬を操る人型の魔物が無表情に問いかけた。魔物特有の角張った耳に、金色の瞳が揺れている。
「そうだと言ったらどうする？」
「そういった挑戦する方々も、運ぶように仰せつかっております」
その言葉にレオン達は顔を見合わせたのだった。

本人だけが気づかない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

今日は何回更新できるか不明ですが、よろしくお願いします。

居心地の良い場所を離れよ

石造りの聳え立つ城。窓からは人影……否、魔族だろう、が見え隠れする。

「それでは私はこれで」

そう馬車で送ってくれた魔族は一礼して去っていく。

罠かもしれないと警戒していたレオン達だが、そんな事はなくここまで連れて来られた。

そして、現在大きな城門の前に立ち止まっている。理由は、

「さっきから何度も押しているんだが、一向に開かないんだよな」

全員で扉を押していたのだが、一向に開く気配が無い。

困ってちょっと下がって扉を見ていると、扉がゆっくりと開き始めた。

そこには執事服を着た魔族が困った顔でこちらを見ている。

「この扉は、外側に開くように設定されていますので、押されても開かないのです」

「すみません」

何故か謝ってしまうレオン達。そして中を案内されるも、人らしい給仕もちょくちょく見かける。

全員、美形の男だが。

それは良いとして、どういうわけか一室に通される。

「ただいまご主人様は忙しいので明日までこの部屋でおくつろぎください」

「……えっと、俺らは勇者で……」

「存じています。他に何かございましたら、備え付けのベルを鳴らしてください」

そういって去っていく案内人の魔族。

高級な感じの宿というか何というか。カノンは首をかしげる。

それにダブルベッドが二つしか無いとか、何かがおかしい気がす

る。
加えて、ここで待っていてくれと部屋に案内される事自体がおかしい。そもそも自分達は勇者で敵なのに？。
「どうしようか……そうか、家捜しを！」
と、レオンが言った瞬間再び先ほどの案内人が顔を出し、
「もし、調度品を壊すようなことがありましたら、それ相応の代金を払っていただくか、体で償って頂きますので、ご了承ください」
事務的に告げる魔族。それに、レオンが反応した。
「あ、はい、分かりました。所で、体で償って貰うというのは？」
「東の城壁が最近崩れかけていますのでそちらの補修です、それが何か？」
「ですよねー」
そのまま去っていく魔族の案内人。とりあえずカノンは一発レオンを殴っておくかどうか悩む。
どうしていつもいつも、そういう発想に結びつけるのだろう……はあ。
「と、いう事はだ。これから魔族の兄ちゃん姉ちゃんをナンパに行ってもいいってことか？」
「……下手すると、物理的な意味で喰われるよ？」
頭が痛くなりながらもカノンはそう忠告する。
もっとも、高位の魔族……特に知能の発達した魔族は確かに人間を喰う事が出来るが、基本的に性交渉で魔力を食らうことが多い。その方が、捕まえる手間が省けるからだ。
ようするに、キスしまくりというけしからん話なんだよな、とカノンは心の中で呟く。
もっとも満月の夜といった魔物の衝動が強く出た時はその限りではないが。
一応魔族同士でも魔力を喰らう事はできるのだが、闇と光という相反する者同士、お互い求め合う傾向が強かったりする。
さて、それは良いとして。

「大丈夫だって。知能のある奴は、見境なく襲ってこないし、というわけで俺は行く！」
く、余計な知識だけ増やしやがって、とカノンは心の中で毒ずく。
そして意気揚々と駆け出したレオンに向って、カノンは杖を振り上げて、電撃の魔法を使おうとして、外れたら弁償という言葉が浮かび慌てて魔法を使うのをやめる。
その僅かな時間差で完全に後れを取り、カノンはレオンを見失ってしまう。
「……良いだろう、この僕を甘く見たことを後悔させてやる！　イオ、トランは留守番よろしく！」
任せてー、とイオが答えるのを尻目にカノンは走り始めたのだった。

レオンだって実は考えていたりする。
「さてと、この城の内部構造をある程度知っておいて、いざという時の脱出経路を決めておかないと」
そもそもこの依頼、何かがおかしいのだ。何か別の目的がある気がする。
それに、この前会ったあいつもカノンの事を欲しいって言っていた。
確かにカノンは可愛くて綺麗で魅力的だが、それだけで選ぶような奴ではなかった……はず。
いや、でもカノン、本当に可愛いし。それもありえる、か？。
だが、計算高いあいつの事だ。それだけのはずが無い。わざと負けたのも何かの布石か？。
魔法の明かりが灯るであろう窪みは、目印になりそうに無い。窓も同様。
本当に構造がとても単純で分かりやすい。もっと入り組んでいるものだと思ったが、そんな事は無い。
そして途中から部屋を覗くのを止める。

先ほどから同じような客間にばかり。階を下がると厨房があり、そこにいた魔族とおじさんがに汚れたままここに入ってくるなとレオンは怒られた。
大体分かったの、上の階を目指す事にする。
そういえば偉い奴って上のほうに住んでるよねと思うも、そこからは人間にも会う。それはそれは美形の。
とりあえず、ナンパしているふりをしつつ、そこら中を駆けて、人や魔族の気配がなくなる。
この場所に違和感をレオンが感じていると、通路の一角に一人の魔族が待ち構えていた。
黒髪に金色の瞳。
年若く見える魔族だが、そもそも人間と魔族の年齢を一緒に考えてはいけない。
幼い姿でも、ジジイだったりババアだったりするのだから。
見た目の感じから、レオンと同い年のように見えるが。
彼はにこやかに友好的な笑みを浮かべてレオンに言った。
「一発殴っていいかな？」

居心地の良い場所を離れよ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

別の話も書きたいけれど、なんか、今すごい話が思い浮かぶ。

振り返れば奴がいない

「お断りします！　痛いのは嫌です！」
レオンは言うも、拳を握り締めて繰り出してくるその魔族を素手で受ける。両手を押さえて、ぎぎぎと力比べをする。
それを見て更にその魔族は苛立ったように、
「嫌だといって止める奴がいると思うか！　さっさと抵抗を止めろ！」
だからといって大人しくやられる奴はいない。加えて、相手はレオンだった。
「無理矢理はいけないと思います！」
「何の話だ！」
「卑猥な話です！」
「更に悪い！　気持ち悪い事を抜かすな！」
としばらくぎゃあぎゃあ話して、二人はその状態のまま黙る。
その沈黙を破ったのはレオンが先だった。
「……何故俺が殴られなければならないのですか？　だって初対面ですよ？」
その問いかけに、ふんとその魔族は見下したように笑って、
「分からないのか？　自分がどれほど酷い仕打ちを私にしているのかを！」
「えっと、初対面ですよね」
「初対面だ。だが、お前の事は話を聞いて知っている。情報収集は基本だからな」
「はあ、それで、どのような理由で？」
それに深々とその魔族はため息をついて、それから、
「……お前と私はキャラがかぶっているんだ」
「……（ー・ω・、）」

「そんな顔をするな！　こっちは死活問題なんだ！」
「いや……そうか、うん。でも別にそれほど迷惑かけて無いんじゃ……」
「一見そう見えるだろう？　でもだな、アピールポイントって大事なんだ」
　レオンは、はっと思い当たる。
「まさか……お前もカノンを……」
「呼び捨て……呼び捨てだと？　死ね！」
　怖ろしい程の魔力と殺気に、レオンは命の危険すら感じて、けれど戦おうと剣に手をかけるが、
「レオン！　こんな所に居た！　」
　そんなカノンの声に、レオンが来るなと叫ぼうとして、どうしてか魔族の殺気が瞬時に治まる。
　よく見ると、目の前の魔族が顔を真っ赤にしてカノンを凝視している。
　そしてカノンの目がその魔族を捕らえた途端、その魔族は脱兎のごとくカノンと反対方向に逃げ出した。
　それを呆然と、見送ったカノンはポツリと呟く。
「僕はそんなに怖いのか？」
「いや、カノンがモテモテなだけだと思う」
「は？」
　間の抜けた声をあげるカノンに、レオンは苦笑する。
　本当にカノンは自分がどういう風に見られているのか分かっていないから困る。
　その方が、レオンには都合が良いといえば良いのだが。
「……あいつか」
　当のカノンはといえばじっと、先ほどの魔族の逃げていった方向を見ている。
　それが何処となく深刻そうで、レオンはチャンスとばかりに駆け出そうとして、カノンに足を引っ掛けられた。

「レーオーンー。逃げられると、本っっっ気で思ったの？」
「えっと、もしかして怒っていますでしょうか？」
「これから寝るまでお説教タイムだ。素敵な子守唄だろう？」
「いーや――――！」
誰もいない廊下に、レオンの悲鳴がこだましたのだった。

「うう、いやだ。お説教は……むにゃむにゃ」
しくしくと泣いたように寝言を呟くレオン。
ちょっと言い過ぎたかな、と起き上がってカノンはレオンを見るが、その無防備な寝顔に体の血が騒ぐ。
美味しそう。
「……いや、駄目だから。というか、昼間のあれ見ておいしそうとか無いから」
そう自分にカノンは言い聞かせる。
現在深夜二時を回った所。ダブルベットなので、カノンはレオンと寝ていた。
「うん、カノンちゃんはレオンとだね！」
イオと一緒に寝ようと言ったらそう言われてそうなってしまった。
お互い右端と左端に眠っているから、別にどうということも無い。
無いはずなのに、どきどきしてカノンは眠れない。
そんな折に、魔力を感じた。それを読み取って、カノンはレオン達に見せた事の無い冷たい表情になる。
「招待されたのだから、いくとしよう」
そう呟いて、レオン達を起こさないようにこっそりとベッドを抜け出す。
そんなカノンが部屋を出てすぐに、レオンがまぶたを開いた事など気づきもしなかったのだった。

欠けた月の青白い光が降り注ぐ庭園。
そこに昼間レオンとやり合っていた魔族が立っていた。

強い魔族らしい……何処か高貴で、自信に溢れる特別な者。その美しさに普通ならば見惚れてしまうだろう。だが、
「それで、僕をこんな所に呼び出してどういうつもりだ？」
「少しお話をさせて頂きたかっただけです。魔王様」
その言葉に、カノンの目がすっと細くなる。
「……武器や魔族の兵の準備等をしているかみたが……」
「ありましたか？」
「非常に上手く偽装されていた」
「ばれてしまいましたか。さすがは魔王様、といった所でしょうか」
あっさりと認めてしまうその魔族に、カノンは冷たく告げる。
「逆らうつもりか？　この僕に」
その問いかけに、怯える所かむしろその魔族は笑みを深くして、
「……本当は興味が無かったのです。僕はまだ名前を襲名していないのですが、父が貴方の父君に懸想をしていた事もあり、準備をしていたのですが……気が変わりました」
「それで、逆らうつもりか？」
「……貴方を追い落とすつもりはありません」
「信用しろと？」
「逆らうつもりならば、とっくの昔に貴方の大切な勇者達と共に葬っていますよ？」
そう、何処かおかしそうに残酷な事を口にする魔族。
確かに言われたとおりだが、レオン達が殺されると聞いてカノンの中から殺気が湧き出てくる。
そこで彼は、笑うのを止めて真剣な表情になった。
「そんなに勇者達といった人……光がいいですか？。同胞の闇ではなく？」
「何の話だ？」
意味が分からないと思い、聞き返す魔王を彼はじっと見て、ふうっとため息を付いた。
「分かりました。僕にもまだ、可能性は残されているという事です

ね。所で魔王様、僕はまだ名前を襲名していないので、リンツとおよび下さい」
「……リンツ、か。分かった、覚えておこう」
「それでは、今日ですね、勇者達と茶番をいたす事にしましょう」
「……そういえば昼間、やけにレオンに突っかかっていたがどういうことだ？」
「似たもの同士なので衝突した、それだけです」
「そういうものなのか？」
「そういうものです。それでは失礼させていただきます、魔王様」
と、去ろうとするリンツ。けれどすれ違いざまに魔王の頬にキスをする。
「な？」
「本当に可愛らしいですね、魔王様」
何処か楽しそうに笑いながらリンツは去っていく。
カノンは、リンツの触れた頬に手を当てる。
まだ感触が残っている。何なのだこれはと、人よりも長い時を生きたカノンは思ったのだった。

「あれ、君、いたの？」
知っていたくせにとレオンは舌打ちする。そして牽制も忘れない。
「カノンに手を出すな」
「まだ君のものでは無いでしょう？」
冷たい火花が散って、けれどレオンのほうが先にきびすを返す。
カノンが戻る前にベッドにいなければならない。と、
「君もほどほどにした方がいいよ？」
そう忠告されてレオンはふりかえると、そこにはもう誰もいなかった。
それを見て、もっと強くならなければとレオンは心の中で思ったのだった。

振り返れば奴がいない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

あと一回更新できるか？

考えるな、感じるんだ

「主人がお待ちです」
二回ノックされてから、案内人の魔族が顔を出した。
因みに、現在、ステーキ肉（カノンの分。カノンは果物しか食べないことになっている）の争奪戦が三人の間で行われていた。
「肉、肉を寄越せ――――！」
「ふ、いくら我らが勇者様レオンといえど、肉は渡さない！」
「肉、肉、肉、肉」
飛び交う矢に短剣に剣撃＋魔法。
とりあえずカノンは結界を張ってその中から三人が出られないようにする。
正確には壊したり汚したりしないようにしたわけだが。
「なんでこんなに醜い争いを……」
カノンはそう呟かずにはいられない。
食事というものは、あれほど仲の良かった仲間をかくも……いや、世の中弱肉強食だし仕方がない、のか？。
そして案内人も案内人である。
その惨状を見ても顔色ひとつ変えない。よく訓練されている。
「ご主人がお待ちです」
再度、案内人が告げると、三人が争うのをようやく止めた。それを見計らって疲れたようにカノンは三人に告げた。
「……三等分して三人で分ければ良いのでは？」
その言葉に、三人は顔を見合わせたのだった。
「はっはっはっは、よく来たな汚れた勇者よ！」
色々な所から角のようなものが生えたお面をかぶった変な生き物が一人大きな部屋で待っていた。
レオンは声から昨日会った魔族と推察する。が、

「……なんで俺が汚れているんだ？　カノン」
「何で僕を見るんだ。僕が知るわけ無いだろう？」
小声で言ったのに、何故か彼まで届いたようで、
「あ、カノン様の事をまた呼び捨てにした？！」
「「「「……（レオン一行）」」」」
「ああ、沈黙が痛い。ぴりぴりしちゃう！」
こそこそとレオン達は輪になって話す。
「あいつ、なんだろう……レオンと同じ臭いがする」
イオが、とてもとても深刻そうに顔を真っ青にして告げた。それにレオンは顔をしかめて、
「失礼な！　俺はあんな変な奴じゃない。なんだその目は！　そんな目で俺を見るなー！」
うわーんと嘘泣きするレオンをカノンとイオとトランは無視して、無いわーと三人で呟いた。と、
「聞こえているぞそこ！　誰が変な奴だ！　私は強いんだぞー！」
大丈夫じゃない答えを叫ぶその魔族に、全員でふうっとため息を付いてから、レオンが一応主役なのでその魔族に言った。
「取り合えずそこの不細工、俺が勇者レオンだ。連れて行った美形を返してもらう！」
「不細工！、今不細工って言ったか！」
そこで被り物を、頭から抜いた。中から出てきたのはやはり昨日の魔族。
彼は自分を指差して、
「これが私のハンサム顔だ！　不細工など断じて無い」
漆黒の黒髪に金色の瞳。確かに美形である。きらりと光り輝く白い歯がうざい。
だが、それ以外にも張り合う変な奴がもう一人。
「ふ、この俺のイケメンな俺に勝てるかな！」
きらりとレオンも歯を光らせる。
それを見てカノンは頭痛がした。そしてすぐ傍に先ほど案内して

くれた魔族が残っている事に気づく。
試しに聞いてみた。
「……どうしてあんなになるまで放っておいたんですか？」
「いちいち考えますと、疲れますよ」
顔色一つ変えない。よく出来た魔族だとカノンは思った。
そして、似たもの同士の戦いは更にヒートアップする。
「自分でイケメンといっていて恥ずかしくないのか、この変態勇者が！」
「自分こそハンサムとか自分の事を言って、恥ずかしくないのか！
この変態魔族」
「黙れ、バーカ」
「馬鹿って言った奴が馬鹿なんだからな！」
口喧嘩のレベルが子供の喧嘩レベルになっていく。
どうするんだよこれとカノンは思った。そこで、
「そもそも人間の美形ばかり攫ってどう使用って言うんだ！　喰うのか！」
「下品なやつめ！　美しいものはただ愛で、鑑賞するものだ！　触れるものでは断じて無い！」
「はん、本当か？　だったら今すぐそいつ等を呼んで来い！」
「良いだろう、君達、来るんだ！」
ぱちんと指を鳴らすと、転送されてくる銀髪美少年が沢山。
「ふふふ、私の美しさを引き立てるのに彼らは素晴しいと思わないか？　穢れた勇者よ」
「きゃー、リンツ様素敵！」
一斉に褒め称える少年達。
いい加減カノンは頭が痛くなってきた。こんなのが魔王の次に強い魔族？。これが？。
もう泣いていいかな、これ。
そこで珍しくきりっとした顔でレオンが問いかける。
「何故、銀髪美少年ばかりなんだ？」

「決まっている、カノン様が銀髪だからだ！」
嫌な沈黙が支配した。視線がカノンに集中する。
その視線がリンツを讃える少年達からの嫉妬の視線が多数混ざっている事にカノンは気付く。なので、
「……気持ちが悪い。戦略的撤退をします」
くるっとその場から立ち去ろうとするカノンに、焦ったようなリンツが、
「ま、待ってください、カノン様ーっ。というか良いのですか？任務遂行できませんでしたという事で」
「……分かった。もう少し話を聞こう」
生きていくって本当に大変だとカノンは思った。そこで、
「ふ、男としての魅力で引き止めたと……ああ、すみません調子に乗りました、許してください」
仕方が無いので、カノンは静観する事にした。
そして、再びリンツはレオンへと向き直り、上半身の衣服を脱ぎはじめた。
脱いだその上半身は、意外に筋肉質で着やせするタイプであるらしい。
そして腕を曲げて、力瘤を作ってみせる。
「ふふふ、勇者よ、お前のような優男に、このようなものは出来まい。私も日々トレーニングを重ねてようやくこうなったのだから！」
魔族なんだから体鍛えるより魔法の研究しろよとカノンは思った。
そもそもどんなに体を鍛えようと、魔法で一発だろう……剣使うわけじゃないんだから。今だって装備していないじゃないか。
しかし、それに呼応するかのようにレオンが不敵に笑い、
「ふ、その程度で筋肉自慢とは！　恥かしくないのか！」
「貴様！　わが筋肉を愚弄する気か！」
「そんなの筋肉じゃない！　贅肉だ！」
「く……言わせておけば……良いだろう、そこまで言うのならばお前の筋肉の力、試してやる！」

いつから筋肉の戦いになった。カノンはいい加減頭痛を覚えるどころか、何も感じなくなっていた。
「勝負は腕相撲。三回勝負だ！」
「そうすればそこにいる少年達を返してもらえるな！」
そこで少年達がブーイングっする。
「ええー、ここのほうがいい生活できるのに！」
「それに周りは美形達ばっかりだし、リンツ様素敵だし、きゃっ」
「それに給料が良いんですよ――！」
とかなんとか。気持ちは分かる。気持ちは。
でもカノンは理性で考えるとそれは駄目なんじゃないかと思う。
そこで、
「……一回帰ってからまた来れば良いんじゃないか？」
レオンが珍しくもっともなことを言う。が、
「えー、めんどくさーい」
何だろう、イラッとする。そもそもなんでこちらが悪者のようになっているんだ。その腐った性根を叩きのめしてやりたい……これは年長者の務めだよな、近頃の若い者は本当に……。
「カノンちゃん、怖いからもっと穏やかに笑って、ね？」
「イオ、僕はそんなに怖い顔をしている？」
「美人が台無しだから、止めた方がいいよ。ね☆」
カノンは笑みを消して無表情になった。実はそれも結構怖かったが、イオは黙っていた。
さっきの笑みよりはましだ。
「だが、そちらが負けたらカノン様を貰う！」
「カノンは商品じゃない！」
「ふん、カノン様を商品にしないなら、私は勝負しないもんねー」
そうそっぽを向くリンツ。仕方が無いので、レオンの傍に行ってカノンは袖を引っ張った。
「レオン、僕を景品にして」
「でも……いいのか？」

「勝算は？」
そこで清々しい笑みをレオンは浮かべた。
「１００％だ！」
「健闘を祈る！」
パシンと手をカノンとレオンは打つ。
その様子が気に入らないのか、リンツがその姿に似合わず、けっと呟いたのだった。

考えるな、感じるんだ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

後一話で一区切り……今日の更新は、無理、か？。

筋肉の力は偉大

「ｙｏｓｉ、今こそ新技を試す時！」
そう叫んだかと思うと、レオンの上半身の衣類が弾け飛んだ。
中から現れたのは、筋肉隆々となったレオン。上半身だけ異様に発達したレオンだ。
ちなみに顔だけは元のままなので違和感しか感じない。
だがそのあまりにも衝撃的な光景に、カノンも含めて誰もが言葉を失った。
「じゃあ行って来るから☆」
カノンに笑いかけて歩いていくレオンをカノンは引き止めた。
「カノン？」
「『カノン？』じゃない！　それ、そんな技……まさか、この前レベルアップした時に……」
「そうだ！　やっぱり男は筋肉だよな！」
そんな楽しそうなレオンを見て、カノンは泣きたくなった。でも泣いてもどうにもならないので一先ず、
「その技、返品して来い」
「え、でも……」
「一週間以内で戦闘に未使用であれば返品できたはず」
何で人間というか敵の技の管理まで、魔王であるカノンがしないといけないのだ。というかそんな知識が必要になるなんて……。ため息ばかりがカノンの口から零れる。
が、レオンは首を横に振って。
「え、嫌だよ。俺この技気に入っているのに」
「レオンは弱いんだから、少しでも良い技を持って、選択肢の幅を……」
「凄く素敵だと思わないか、この筋肉！」

きらきらと目を輝かせるレオン。可愛いよ、確かにそんなレオンは可愛いとカノンは思う。けれど、
「……分かった」
「だろ、この筋肉……」
そこで、カノンはレオンを杖で殴った。
「ぐふっ」
そしてそれと同時にみるみる筋肉が消えていく。後には、レオンがいつもの体型で気絶して倒れる。
カノンが使った業は、いち、にの、ポカーンで技を忘れさせる魔法だ。
これで再度新しい技が契約できるはず。
「まったくレオンは、悪ふざけが過ぎる……」
そうカノンは嘆息して、今はレオンをこのままにしても大丈夫だな、次はと、カノンはリンツに向き直った。
その表情は、先ほどまでの困ったような穏やかな表情ではない。
それを見て、リンツを取り囲む少年達は言葉を失う。
それいに対してリンツは、へえ、と面白そうに笑った。
「もしかしたなら、カノン様がお相手してくださるのですか？」
「ええ、僕が相手になりましょう」
そこで、襟首を掴まれて、カノンはずるずると壁際まで引きずられた。この感じはイオだなとカノンは気付く。
そして、イオが怒ったようにカノンを見る。
「どうするの、カノンちゃん。レオンだって、確かにふざけてあの業を選んだと思うけど、今必要な業でしょう！」
「……必要ないよ。だって僕が勝つから」
そう言い切るカノンに、イオは何ともいえない顔をする。
そして、搾り出すように口を開いた、
「……もう少し僕達を信用してよ。力になりたいんだ。レオンは僕達よりもずっと信じて欲しいはずだよ？」
「……」

まさかそんな事を言われるとは思わなかったので、カノンは本当に驚いた。そしてそれをそのまま顔に出した。
それを見て、更にイオが何か思うところがあるようにしかめる。
だからカノンは精一杯の笑みを浮かべてイオに答えた。
「……ごめん。でも、ありがとう！」
それは本心からだった。本当に心配されていることが分かって、それは悪い気はしない。だから、精一杯自分にできることを彼らのためにしようとカノンは決めた。
一方イオは、その笑顔を見て反則だと思った。これでは怒れない。
「じゃあ、僕、がんばるから」
そう小走りで、いつの間にか要された机にカノンは座る。目の前にはリンツがいる。
「上着は脱がなくていいのか？」
「ええ、かまいません」
そう答えつつ、合図があって一回戦が始まる。
そこで少年達がリンツに声援を送る。
「「がんばってリンツ様！」」
それにイオが対抗心を燃やす。
「よし、僕達も応援だ！　僕は踊る！」
「では俺は、笛を吹こう！」
ぴーひーと笛の音に合わせて、イオが踊る。それは確かに見るものを惹きつける踊りではあったのだが、
「てい」
その油断をカノンは利用した。
第一回戦は、カノンの勝ちである。リンツはぶすっと頬をふくらませて、
「そこの人間、踊るな！」
「別にそちらも声援を送っているのでは？」
面白い冗談ですねとにっこりとカノンは笑うと、リンツが、
「じゃあ、お前達静かにしろ。これでそっちも止めろ」

気分を害したような少年達。それを見て、カノンはほんの少し溜飲が下がると同時に、皮肉を言いたくなる。
「残念ですね、イオの踊りは凄く魅力的なのですが」
「目障りだ」
きっぱりと言い切ったリンツ。そこで再び腕を組みなおす。
二回戦の合図がある。沈黙の中、拮抗する力、そこで、
「痛い！」
カノンが悲鳴を上げた。するとリンツが焦ったように力を抜く。だが、それがカノンの狙いだった。
「てい」
またしてもカノンの勝ち。よって勇者達の勝利である。
「僕達の勝ちです」
えー、と少年達が言っているが、カノンは聞こえないふりをした。
カノンは、目の前のリンツに視線を戻す。その結末に、リンツは納得がいかないらしい。
そのすねた様な表情がレオンに似ていて、カノンはほんの少し笑ってしまう。
そこでリンツが席を立って、カノンのすぐ傍までやってくる。
そしてカノンの顎を掴むと、自分の唇に重ねた。
「んっ……んんっ」
ちりりと唇を通して妙な感触を感じたが、カノンはそれどころではない。
と、襟首を掴まれて倒れこむように後ろに引きずられて、そのまま抱きかかえられる。
見上げるとレオンが居た。
ただ、いつもと違って頼りない表情ではなくて、何というか……。
「……カノンに手を出さないでください」
「警告はしたよ？　君に何が出来るんだい？」
「貴方には関係ありません」
そのまま、今度はカノンを抱き上げると、レオンはきびすを返す。

リンツも何も言わない。
レオンの様子がいつもと違うから、抱きかかえられたままカノンはレオンに恐る恐る声をかける。
「あ、あの、レオン？」
「ああ、そういえばカノンが勝ったので、俺に君達もついてきてくれ。イオ、トラン、帰るぞ」
さっさとこの城から出たいというかのように、そしてレオンはカノンと話すつもりはないらしい。
それが頭にきて、カノンは下ろせというも、まったく聞く耳を持たない。
結局、宿に戻るまでカノンはレオンに口を聞いてもらえなかった。

その広い広間に残っていたのはリンツ一人。
「さて、と。負けてしまったが……手は打った」
そう連絡を入れると、相手の三人は笑う。実際に会うとどうだった、ときかれてリンツは答える。
「綺麗で、魅力的で、本当に今すぐ自分のものにしてしまいたかった」
そう答えると、彼らはそれは楽しみだと答える。
そして幾つか話してそして、会話を切る。
「カノンカース様、か」
リンツはその名を口の中でそっと転がして、美味しそうに飲み込んだのだった。

筋肉の力は偉大（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

一区切り付きました。次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

困る質問Ｎｏ，１

宿に着いて、
「キス、何で黙ってされていたんだ？」
「いや、突然の事で……もしかして、レオン、それで怒って？」
「……大切な”幼馴染”だからな」
本当はそれだけではない事をカノン以外は全員知っていたので、彼らから見ると修羅場のような状態である。
だが、当のカノンは嬉しそうだった。
「そっか、心配してくれたんだ」
「……そうだ。まったく、キスなんかされて……」
カノンの雰囲気からどう考えてもレオンの怒っている意味を勘違いしているらしい。それはそれで好感度ｕｐかとイオが分析していると、
「そうだよね、百回キスすると子供が出来るしね！」
レオンが固まって、それを聞いていたイオが噴出した。しかもそれだけでは笑いが収まらないらしくお腹を押さえて床に転がった。
「イオ……失礼だよ。僕はそんなにおかしい事を言ったつもりは……レオン？」
真剣な表情でレオンはカノン両肩に手を置いて聞いた。
「カノン、いま自分が何を言ったか分かっているのか？」
「え？　だから、百回キスすると子供が出来るって」
それに今度はふいっと、レオンはイオ達の方に歩いていき、
「どうしよう……」
「いや、僕に言われてもね……」
「試しに子供がどうやって生まれてくるか聞いてみたらどうだ？」
「トラン、いいアイデアだ」
そこで不思議そうにこちらを見ているカノンに、レオンは聞いてみる。

「カノン、子供がどうやって生まれてくるか知っているか？」
「確か人間の子供はキャベツ畑で、魔族はコウノトリが運んでくるんだったか……逆だったかな？」
「よし、わかった。そのままでいい」
　へんなのと首を傾げるカノンをよそに、レオン達は作戦会議をする。
「どうするんだ、あれ。というか、うーん」
「いっそレオンが教えてあげたら。手取り足取り、ね？」
「……そうだ、とりあえず俺が百回カノンにキスして子供が出来ないって事を示せばいいんだ」
　そんなレオンの発言に、イオがにまにまと笑い煽る。
「レオン、良いから襲っちゃいなＹＯ☆」
「無理だ。カノンはまだ俺の事……”幼馴染”としか思っていないから」
　カノンの事を大事に思っていますと暗に言うレオンに、イオは更に楽しそうに笑って、
「あら、純愛なんだ」
「落とす過程が楽しんだよ。それに、それをやってから、その後で子供が見たらいけない本を買いに行かないと」
「自分で教えてあげないの？　カノンちゃんに、こうとか、こうとか」
「……俺が知らない内に、『教えてあげるから来ない？』『分かった』『アッ―！』てなったらどうするんだ！」
「……あのカノンちゃんをどうこう出来る人がいると？」
「はっきり言おう、エロ用語で顔を赤らめるカノンが見たい！」
「よし、行け」
「ありがとう、わが友よ」
　がっしりと手を握り合い、頷く二人。その二人を良い友情だなと、トランが表情を変えることなく頷いていた。

「え？……キスするの……だって……」
あまりにカノンが顔を真っ赤にしてしまうから、レオンまで頬が熱くなる。それに顔を赤らめるカノンが可愛いから仕方ないとレオンは思う。
「その、レオンは僕と……」
「ち、違う。カノンは”幼馴染”だからそれ以上の感情は無い」
「だったらどうして」
「……”幼馴染”だから、間違っている事を教えておかないと」
「そんな！　父様が嘘をついたって言うのか！」
カノンが何故そんな事を行っていたのかレオンは気付く。そして、成長過程で何処かでそういう話を聞くはずなんだけれどなと苦笑して、
「ほら、子供の時ってそういう話はわざと避けるようにするんだ。きっとカノンの事が可愛いから、わざと嘘をついたんだ……」
「そう、そうか……」
しょぼんとするカノンの隣にレオンは座り、カノンの顎を右手持ち上げる。
そのままレオンはカノンに唇を重ねた。カノンはレオンの唇が柔らくて温かくて、”甘い”と思った。
そして思った瞬間、何を考えているんだと慌てて飛びずさる。口がぱくぱくするだけで、カノンは声が出ない。
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」
「何だ、この前の夜は積極的にやってきたのに」
「だって記憶にないし。それにキスしてもし子供が出来たら……」
「責任とってやる。だから、やってみよう、百回のキス」
前にも増して顔を赤くするカノン。実の所、責任とってやるとか、レオンの顔がこういう顔していればカッコイイと思ってたとか、本当に心臓に悪い。
そしてカノンも、してみても良いと思う自分と、レオンが嘘つくはずないからきっとそんな事はないのだろうという、何処か残念な

気持ちで頭がいっぱいで、気が付くとレオンに再びキスされていた。
今度はカノンは逃げなかった。
なのでレオンは軽く唇をすってから離す。
だが、そんなレオンの目に映ったカノンは何故か不敵な笑みを浮かべていた。
「下手だな」
衝撃的なことを言われて、レオンがえっ、となっている隙にカノンがキスしてくる。
軽く触れて吸うだけだが、上手い。
「どうだ？　これくらいでないと」
「カノン、一体今のキスは誰から教わったんだ！」
「え？」
「誰だ、一体誰に……」
レオンが慌てたように聞いてくる。よく見ると怒ってもいるようだ。だから、おかしなレオンとカノンは笑って、
「誰もいないよ？　それはレオンも知っているでしょう？」
確かカノンがそういう経験がある設定で記憶操作はしていなかったはず。案の定、レオンが黙る。
「……悪かった。続きするな」
納得がいっていないようだが、執拗にレオンからしてくる。
本当にレオンは”幼馴染”が大事なんだなと思い、カノンは胸がちくりと痛んだ。
それが何だか癪で、カノンもキスで反撃を開始する。
しばらくそれを繰り返して、百回になる。
「な？　何も起こらないだろう？」
「そうだな。僕が間違った知識を……え？」
そこでカノンは窓の外を見て、声を上げた。
何かが近づいてくる。
それは大きな鳥で、何かを抱えているらしかった。
それが真っ直ぐにこちらに向ってきて、そして窓から飛び込む。

大きな鳥だった。それはいいとしてその鳥が持っているものの方が重要だった。
籠の中白い布に包まれてそれは泣いていた。
「赤ん坊？」
誰とも無しにカノンが呟く。
それは、人間の赤ん坊だった。

困る質問Ｎｏ，１（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

ｗｅｂ拍手に、自作絵を入れておきました。カノン君です。下手な絵で、女の子に見えるかもしれないのですが、それでもｏｋという方は見てやってください。

また、ムーンライトノベルの方の同名小説のｗｅｂ拍手は、番外編となっています。１８歳以上の方はそちらもどうぞ。今のところ投稿内容は同じです。かりうむいおん、で検索すると出てきます。ＩＤは一般向けと分けているので、そこからのリンクではいけません。すみません。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

機会の逃げ足は速い

おぎゃー、おぎゃーと泣く赤ん坊。そしてなんか大きい鳥。
「えっと、レオン？」
次の瞬間、カノンはレオンに押し倒された。
呆然と見上げるカノンに、レオンは真剣な表情で、
「……責任持つから、最後までやらせてくれ」
そのままレオンはカノンに覆いかぶさろうとして、ドアが勢いよく開いた。
恰幅の良い女性が入ってきて赤ちゃんを抱き上げる。
「私の赤ちゃん！」
何が何だか分からない。

その女性の話によると、その大きな鳥は”コモチコウノトリ”といって、赤ん坊と一緒に育てると、赤ん坊が攫われた時取り戻してくれるらしい。
「ただこの子方向音痴でね。本当にご迷惑をおかけしました」
そう言って、赤ん坊は彼女に連れて行かれたわけだが。
「……焦った。俺、本当に……」
「僕もだよ……」
未だに衝撃が抜けきらないらしく、ぼんやりとしているレオンとカノン。それを見ていたイオがカノンの隣に座って面白そうに問いかける。
「どう、カノンちゃん、レオンとなるって思ったら……」
カノンは顔を赤くしてふるふると首を振った。
「無い、無いから。そんなの……レオンの事は”幼馴染”で仲間だとしか思っていないから！」
「うむ、仲間という好感度アップと……こんな面白い事メモしておかなくちゃ」

そう、青色の手帳を取り出して書き記すイオに、カノンはさっとその手帳を取り上げようとして失敗し、床に顔面からぶつかりそうになり寸での所でレオンに引っ張られた。
「大丈夫か？　少し休もう」
「うん、大丈夫だよ……それよりレオン、一つ聞いていい？」
「何だ？」
そこでカノンが本当ににっこりと自愛に満ちた表情で、
「最後までってどういう意味？」
「……」
「……何か言え」
レオンは黙ったまま、ふっと笑った。
「……合体するんだ」
「合体？」
合体ってアレだよな、魔物とかを融合させて別の魔物にしたりとかの、後は金属と融合させたりとか？。
「そう、手に様々な文様を描き出す事により、魔法を使うための呪文を短縮でき、時に目からビームを……」
「レオン、本当は違う意味だろ？」
レオンの瞳を覗き込んで、カノンは囁く。
それが予想外でレオンは目をぱちぱち瞬かせる。
「……どうしてそう思った？」
「ずっと見ていたから、レオンがどんな時に嘘をつくのか分かるんだ」
意外に、カノンはレオンの挙動を見ていたらしい。でも、そういった事が分かるのは、ずっと目で追いかけないと気付かない。
そして、逆にそう言うという事は、カノンはいつもレオンの事を見ていますよという事で、とりあえず外野から見ていたイオは面白い事になってきたと状況を見守る。
「そうだな、だったら最後にまでの意味、カノンに教えてやるよ。……実技を通して」

レオンの真剣な表情。イオは邪魔したら悪いかなと、空気を呼んで席をはずそうとする。
そしてレオンがカノンの手を引っ張り引き寄せようとした途端、再びドアが開かれた。
「すみません！　先ほどは失礼しました。これはほんのお礼で……」
先ほど恰幅の良いおばさんが入ってきて、何処か不思議そうにレオン達を見たのだった。

機会を失うとそれ以上何も出来なかったり。
そして、そういった本を買う気も失せたレオンは、カノンに付き添いで依頼料を貰いにいった。
「これが、今回の成功報酬です」
「ありがとうございます！　これでしばらく食い繋げる……」
後光が差すんじゃないかという位嬉しそうに笑うカノンに、レオンは何故かがんばらなきゃいけない気がした。
そこで、白い服を着た僧侶らしい少年がレオンに向って走ってくる。
「レオン様！」
彼はそのままレオンに抱きついた。けれど、レオンは慌ててその少年を引き剥がして、カノンの方を見る。
案の定、先ほどと同じにこやかだが背負っている何かが違う。
すぐさま、オラオラされてしまいそうなそんな怖い雰囲気。まずい、これは危険だ。
「……レオン、彼は？」
「いや、知らない。少なくとも俺が声をかけた人間なら、覚えているはずなんだが……」
「酷いですレオン様！　昨日会ったじゃないですか」
「昨日……」
確か、ホーリィロウと戦ったはずだが……レオンは首をかしげる。
記憶に無い。と、

「ああ、あの時居た僧侶か。で、敵が僕達に何の用？」
そうカノンが、その僧侶を上から下まで見て、酷薄な笑みを浮かべた。
ちなみに背が少し低めのカノンよりも彼はもっと低い。
だが彼はカノンを逆に見上げて、馬鹿にしたように笑った。
「貴方はレオン様の一体なんですか？　聞いた話によるとただの幼馴染だそうですが」
「そうだ。それがどうかしたか？」
「ふーん、へー、それを信じろと？」
「そこまでにしろ。カノンに酷い事を言うのは許さない」
そうレオンが割り込んできて、僧侶は大人しくなる。面倒な事になる気配を感じて、レオンはカノンの手を引いて足早にその場を立ち去ろうとすると、後ろから僧侶が声をかけた。
「その人、本当に魔物との混血ですか？」

機会の逃げ足は速い（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

ここのところかせが治ったと思ったらまたかぜの繰り返しです。

皆様もおきよつけ下さい。

ちょっと更新が遅くなるかもです。

深く考えるな、意味はない

振り返るカノンとレオン。
その瞬間に、カノンが僧侶に押し倒された。
「「え？」」
間の抜けた声をレオンとカノンが同時にあげた。そして、そんなカノンと、次にレオンを僧侶が見上げてにたりと笑った。
「適当に言ったに決まっているじゃないですか☆」
そのまま一気にカノンの服の中に僧侶は手を突っ込んでそのまま、カノンをくすぐり始めた。
なまじ生命の危機に瀕していないので、対人スキルの低いカノンはどう対応すればいいのか分からない。とりあえずじたばた暴れつつ抗議の声を上げる。
「やめっ……ひっ……ひあっやあっ」
「ふふふ、よいではないかよいではないか♪」
僧侶は凄く楽しそうだ。そのくすぐり攻めはどんどん激しくなっていく。
加えて、カノンが凄く敏感だという事実をレオンは知る。
これは非常に重要な情報だ。そう、これは非常に重要な情報だ。
しかも、涙目になって息も荒げに顔を赤くしているのも中々よい。実によい。
そうレオンが、うむうむと頷いていると、
「レ……レオ……助け……ひぁっ……ひあっ」
「もう一息かなぁ？」
名前を呼ばれて、レオンは我に返った。
「……助けを呼ばれたから、やめてくれないか？」
「レオン様がそういうのであれば、仕方ないですね」
と、楽しそうに僧侶が笑ってくすぐるのを止めて離れる。
くすぐられていないのに、カノンの体がびくんびくんと小刻みに

震えている。
落ち着かせようと、カノンが息を荒げに呼吸をしているのを見てレンは心配になる。
「大丈夫か、カノン？」
「ひゃんっ！」
「……」
抱き起こそうとしただけで、エロイ声が出た気がする。いや、だって俺まだ何もしていないし、と思いつつレオンは再びカノンに触れる。
「ひっ！」
くすぐられ過ぎて感度が高くなっているらしい。どうしたものか、本当に……。
襲おう。
お持ち帰りして美味しく頂いてしまおう。だってなんかこう凄くこう、可愛いではなくて、確かに可愛いのだけれど、なんかもう良いかもって思うんだ。
「レオン……顔が怖い……」
「はっ、俺は今何を……ぐふっ！」
引いたようにカノンが見上げていると、次にはレオンが呻くとカノンの上に倒れこむ。
「レオン、レオ……え？」
僧侶がカノンに倒れこむ前にレオンの腕を引っ張りあげて、そのまま背負う。
ちなみに僧侶はカノンよりも背が低く非常に華奢である。
そのまま背負い込んで、一息ついてから僧侶はそのまま去ろうとした。だから、即座にカノンは飛び跳ねるように起き上がり、僧侶のフードを掴んだ。
「……放して頂けませんか？　僕は貴方に用はありません」
「散々くすぐっておいて、ただで逃がすと思うか？　僕が。それに、レオンを返せ」

「……レオン様は後、ね。それに、貴方のものでは無いでしょう？」
呆れてものも言えないというように、溜息を付きながら振り返りもせず僧侶が言う。
だから僧侶はカノンがどんな表情をしているのか見えなかった。
「それで？」
淡々とした声音。感情の無い、そんな言葉。僧侶もさすがにレオンの事を気の毒に思う。恋敵とはいえ、レオンがカノンの事を好きなのは一目瞭然なのに。
だから少し苛立ちながら僧侶は言い返した。
「よく堂々とそんな事が……」
そこで僧侶は言葉をとめる。思いの他近くにカノンの顔があった。
その顔は表情が消え失せ、ぞっとするほどに冷たく美しく見えた。
「手を出すな。殺すぞ？」
「……」
カノンの金色の瞳が、魔物の瞳が煌々と輝く。声音も、体が氷の塊になってしまったのではないかと感じるほどに冷たい。
命令されていると、僧侶は理解した。
これは一体なんだ？。威圧感、異質な、とても恐ろしい生き物に遭遇してしまったような。
「もう一度言う、レオンに手を出すな」
その金色の瞳は、僧侶が今まで見た中で一番綺麗で恐ろしい。
逆らってはいけない。でも、この綺麗な生き物は何だ？。
僧侶はその声に従うように、レオンをカノンに渡すその時に、カノンが”何”であるのかを知ろうと魔法かける。けれど、その魔法はカノンが一笑すると共に消え失せる。
圧倒的な力量の差だ。それは、魔族との混血なのかを疑わせるほどに。
カノンが抱きしめたレオンに目を移すと、ふっと優しい笑みを浮かべた。
その笑みがあまりにも澄んで柔らかくて優しげだから、僧侶は油

断してしまう。
レオンに魔法をかけて抱きかかえ、去ろうとするカノンに、やはりレオンを諦めきれない僧侶は手を延ばして肩を掴んだ。
その手は即座にカノンによって弾かれる。さらに、
「僕に触れるな、下種が！」
吐き捨てるように僧侶に言い切る。その目に宿る殺気は、次は無いと物語っている。
その恐ろしさに、僧侶は床にへたり込んでしまった。
本当に何なんだあれは。今まで出遭った魔族と全てにおいて違う。
「やあ、僧侶、どうだった？」
先ほどの行動全てが、ホーリィロウの筋書き通りだった。レオンが僧侶は欲しかったので、協力するという趣旨のはずだったのだ。
けれどこのような結果になってしまった。そして、ホーリィロウは失敗したというのにご機嫌なまま。
また彼の駒として働かせられた事に僧侶は溜息をつく。いつもの事だ。だからあえてそれを問いただすことはせず、
「……ホーリィロウ様。確かカノンが欲しいと言っていましたが、アレを？」
あんな恐ろしいものを欲しいと言う我が勇者を、僧侶は気が狂っていると思う。
けれど、ホーリィロウはそんな僧侶の言葉に、
「そうだよ。欲しいんだ」
「僕は、恐ろしいと思いました。あれは……」
「多くの勇者が望んで止まない果実だよ、禁断のね」
「は？」
時折、詩的な表現をする我が勇者に、僧侶はもっと分かりやすく言ってくれませんかねと思っても口にしない。
以前戦士がそれを言って、しばらく部屋から出てこなくなった。
さすがにそれを今されると困る。
適当に頷いて流す受け流しスキルが僧侶の中で着実に成長しつつ

あった。
「はあ、そうですか。それよりも次はどうするのですか？」
「暫くレオン達を追い掛け回すことにした」
願ったり叶ったりの発言に、僧侶は喜びかけるもののあの怖い生き物を思い出して僧侶は素直に喜べない。そんな僧侶を見透かしたようにホーリィロウは笑いかけた。
「レオンという首輪があるから大丈夫だよ。彼がいる限りカノンは何も出来ない」
そう言われて納得する。確かにカノンはレオンといる時は雰囲気が違う。
ただその言葉に安心を感じると同時に、僧侶には逆に悔しくも思えた。
負けてなるものかと、僧侶は心の中で誓ったのだった。

深く考えるな、意味はない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

辞書には何でも載っている

「あー、カノンちゃん、おはえりー」
イオが本当に楽しそうにけらけら笑っている。そしてトランは、イオの前で正座して黙々とお酒を飲んでいた。
「……何で戻ってきたらまた酔っているんだ？」
「赤ちゃんのお母さんが、お礼だってお酒も持って来てくれたの。本当においしゅうございます。トランもそう思わない？」
「……うむ、酒さえあればどんな奴らでも倒せる気がする」
と頷く二人に、カノンは頭痛がした。とりあえず気絶したレオンをベッドに横にならせて、
「今回の依頼で当分は食いつないでいけそうだよ。でもなくて困るものでもないからこまめに稼いでおかないと」
「ふーん、じゃあそろそろ他の町に移動する？　ここの依頼、ホーリィロウ達が片っ端からクリアしちゃったから、あんまり良いの残ってないし」
「……なるほど、奴らを避けながらの方が美味しい依頼を手に入れられると」
ちなみに、ホーリィロウ達はカノン達を追跡予定であるが、カノン達は知らない。そもそも、
「あの、僧侶って奴が気に入らない！」
面白そうな気配を感じて、イオがカノンに近寄ってきた。
「何があったの？　カノンちゃん」
「聞いて！　あいつ、僕の事をくすぐり放題くすぐったと思ったら、レオンを気絶させて連れ去ろうとした！」
「ふむふむ、それでカノンちゃんはどうしたの？」
「もちろん取り返してきたさ！　まったくレオンは油断しすぎ！」
「それでなんでカノンちゃんはそんなに機嫌が悪いの？」
「それは、”幼馴染”のレオンが連れ去られそうで、そんな弱いレ

オンが許せなくて……」
本当にあの僧侶は許せない。まさかレオンを連れて行こうとするなんて。
僕のレオンを。
そこまで考えてカノンは首をかしげた。
今、自分は何と考えた？。レオンはただ利用するだけで、でも良い奴だから好感は持ってて、優しいし、真面目な顔してればカッコイイし、たまに犬みたいに懐いて来てそれも嬉しいし。
なるほど、ペットに対する愛情と同じか？。そうか、僕はレオンをペットにしたいのか。
でも人間だし、動物と同じようには無理だよな？……どうしよう。
「……カノンちゃん、何か変な事考えているでしょう？」
「そんな事無い！　真面目に考えていただけだ！」
イオは、真面目に考えてキス百回すると子供が出来るとか言っていたんじゃなかったかなと思ったけれど、黙った。とりあえず今は生暖かく見守ろう、”仲間”として。
そこで、カノンの手に古ぼけた本が一冊ある事にイオは気づく。
「カノンちゃん、その本は？」
「辞書だよ。古本屋で買ってきたんだ。安かったから」
「何でまた……魔道書とかの方が良いんじゃない？」
「……この前の事といい性の知識が僕には足りていない。だから辞書を見て勉強する事にした！」
「あ、うん。確かに辞書にはエッチな言葉とか載っているもんね」
「でしょ？　これでもうレオンに馬鹿にされないぞ！　最後までの意味を、絶対調べてやる！」
その情熱は素晴らしいとイオは思ったが、そもそもそれ系の大人の本を見れば一発なのではないかと思う。
あ、そういう本があること自体知らないのか。なるほどなるほど……本当に箱入りだな、オイ。
などと、イオが思っている事も知らず、意気揚々とカノンは辞書

を調べ始める。
　だが、相手をしてもらえないのも酔っ払ったイオはつまらない。もくもくと酒を飲んでいるトランを見ているのも楽しいのだが、先ほどカノンと話している途中許容量を超えたらしく倒れて泥酔している。
「そういえば素直にくすぐられるなんて、カノンちゃん、珍しいね」
「……敵意が無かったから」
「ほう、良い事聞いちゃった♪」
　にまーと笑うイオに、カノンは身の危険を感じる。そもそも酔っ払いと関わって良い事があったためしがない。この前は樽に突っ込まれたし。
「ま、待って、まず話を……」
「問答無用、てい！　ふふ、カノンちゃんてあったかーい」
「やめ！　抱きつくな！　放せ！」
「酷い！　そうだよね、カノンちゃんこんなに抱き心地が良いものね」
「文章が明らかにおかしい！　僕に抱きつく前に寝ろ！」
「やーん、カノンちゃんのいけずー、と見せかけてすりすりすり」
「ふえ！　ちょ、そんなとこ触らないで！　ふえ、ひん！」
　イオがふにゃふにゃ笑いながら顔をこすり付けてくるのを引き剥がそうと、カノンは懸命にがんばっていると視線を感じた。
　見るとレオンが真剣な表情で二人を見ている。それにイオが気付いて、
「良い仕事しているでしょう？」
「ありがとうございます。しばらくおかず無しで大丈夫です」
「二人とも訳の分からない事言ってないで、レオン、助け……」
「レオンも混ざる？」
　面白そうにイオが誘う。それにすぐさまレオンは頷こうとした。
　しかし、じろりとカノンに睨まれて、レオンは固まった。そんなレオンを見て、イオが本当に面白そうに、

「じゃあ、カノンちゃん、レオンをからかってみる？」
「え？　どんな風に？」
耳貸してと言って、カノンが耳を近づけると小声で耳打ちした。
レオンは嫌な予感がした。
カノンがレオンを見て、悪戯っぽく笑う。
「レオンの事は遊びだったんだ」
レオンは、先ほどよりも固まって、真剣にイオに言った。
「イオ、言わせて良いことと悪い事がある」
「おや、レオン怒っちゃった。こういう時はお酒を、カノンに飲ま……くう」
イオが立ち上がったと思ったら、ベッドに倒れこんだ。いい加減酔いが回ったらしい。
ようやく開放されたカノンが、起き上がってほっと一息を付いて、次の瞬間悲鳴を上げた。
「僕の辞書が……濡れて……ああ、もう中の文字が見えない……」
水差しに浸されて、辞書が大変な事になっていた。うっうっと泣くカノンに、レオンはにこやかに笑って、
「ははは、残念だったなカノン」
「レオン、まさかわざと？！」
「さあ、どうだろうね、と、はは、当らんぞ！」
カノンが杖を振り回すと、レオンがそれをひらりとかわす。そうしばらくして、二人とも疲れてしまいその日は寝てしまったのだった。

辞書には何でも載っている（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

引いた時点でお前は負けだ

「何でジュース1本が５００リンもするんだ！　適正価格ってあるだろう！」
「はいはーい、カノンちゃんどいてね。……おじさん、２リンでどう？」
「いいよ」
あっさりと値引きをしたおじさんを見て、カノンは唖然とする。
何だこれ。
カノンが目を白黒させているのが面白いのか、イオは先ほど買ったジュースをカノンに一つ渡す。
釈然としないながらも受け取り、席に着き、その飲み物に口をつけると優しい甘さが広がった。
町の一角の喫茶店。飲みものをカウンターに買いに行ったカノンが凍り付いているのを察して、イオが助け舟を出してくれた。というか、
「……なんで？」
「うん、もっと値切れたっぽかったね。それともカノンちゃんが可愛いからおまけしてくれたのかな？」
「いや、そうではなく、何であんな値段に？」
「ああ、カノンちゃんは知らないんだっけ。この町、フーリエの町は商人の町でね。大抵、一番初めに吹っかけてきて、それを何処まで値切れるかという、そういう町なんだ」
「だから５００リン？」
「そう、値切られる事前提。何も言わなければ店はぼろ儲け。他の町は商品についた値段をそのまま買うでしょう？　だから初めてでこの町の文化知らなくて、多くの場合、相手の言い値で買ってしまうか、話もせず怒って拒否して帰っちゃったりするんだ」
「それじゃあ駄目なんだ。なるほど、だから値引き交渉を……」

「うん。それに初めにすごい値段にしておくと、普通の値段でも安く思えるでしょう？」
賢い町だとカノンは思う。
それに商人の町というだけあって色々な物も売っているし、何より先ほどイオに買ってきてもらい食べた果物も美味しかった。本当によそ見しすぎて危なくイオとはぐれる所だったのだが。
現在新しい町に来て、イオとカノン、レオンとランの二組に分かれて、買い物をしている最中だった。
カノン達は、簡単な装備で、レオン達は少し重めの装備が必要なので二つに分かれたのだが。
「は！　レオンがまた何かアホことをやっている気がする！」
「カノンちゃん、本当にレオンの事が大好きだね」
「な！　イオ、そんな事……」
「”幼馴染”として大好きなんだよね！」
にまにま笑うイオにカノンは嵌められたと思った。そして、ぶすっとして、
「イオはランの事はどうなの？　好きなの？」
「好きだよ、性的な意味で」
ここまであっさりと言われると、カノンは更に仕返しと思える言葉が浮かばない。
悔しくなって、むーと唸りながらジュースに口をつける。
本当にカノンには分からないのだ。確かにレオンといると居心地がいい……のか？。
色々と今までの所業を思い出して、カノンは何故このパーティにいるのだろうと再度悩みかける。
それでも、レオンはいい奴で。もう少しだけ一緒にいても良いとカノンには思えてしまう。
そんなカノンをイオは面白そうに眺めていたのだった。
「何とこの鏡、好きな相手を映してある言葉を唱えるとあら不思議

！　好きな人の色々なエロイ姿が！」
　山盛りの人だかり。全員男ばかりだが、そもそも全人口で女性の割合が少ないのだがそれを贔屓目に見てもアレである。
「おい、トラン、これは買いだよな」
「そうだな、レオン。これを買わねば男ではない」
　今なら可愛いお守りも付けて、いちきゅっぱのー、と話をしているおじさんに、これ買いますとレオン達は告げたのだった。

「で、それで装備はこれだけしか買えなかったと」
「お許しくださいカノン様。ほんの出来心だったのでございます」
「ささやかな夢を買ったのでございます」
「僕、まさかトランにまで正座でお説教する事になるとは思わなかったよ」
　ふふふと顔はにこやかなのに、どす黒い怒りの雰囲気をかもし出しながらカノンは仁王立ちになっている。
　そして一時間が経過した頃。
「カノンちゃん、そろそろ休憩したらどうかな」
「とりあえず、トランは開放。レオンは追加だ」
「何で！」
「気に入らないから！　まったく無差別にそんな……」
「カノンだって興味は無いのか！　ちょっと魅力的だなって子のエロイ姿！」
　言われて、レオンのが見てみたいな、とか頭に浮かんだものの、何でレオンのものが見たいんだ僕は、とカノンは打ち消した。
　そもそもレオンは目移りしすぎて良くない。まったくレオンは僕だけを見ていれば良いのに。
　”幼馴染”なんだから。
　と、そこでトランが悲鳴を上げた。
「な、何ということだ！　く、こんな事って……」
「カノンちゃん、これにただの鏡みたい」

そこでレオンが悲鳴を上げた。
「そんな！　俺の夢が！」
「レオンもそんな悲痛な顔をしないで。僕も残念だけれど、出店によくあるんだ、こう実際買ってみると……て」
「く、明日店主に……」
「明日は、僕と一緒に防具買いに行こうね、レオン」
にっこりと笑うカノンがレオンの肩を叩いた。そんなの探すよりも、まずは防具だ。
だってレオンは弱いのだから。
それを見て、イオが、じゃあ明日はトラン、一緒に買い物に行こうねと誘っていた。
ちなみに嘆きつつも、レオンがにやりと笑っていたのをカノンは気づきもしなかった。
そんなこんなで、レオンは目を放したら駄目だ、買い物でも、とカノンは学習したのだった。

引いた時点でお前は負けだ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

誤解ですか、うふふ

「カノンちゃん、レオンをそんなにロープでぐるぐる巻きにしてどうするの？」
「寝たふりをして様子を見ていたら、早起きして逃げようとしやがりましたので」
「うーん、縄抜けされたら終わりなんじゃない？」
「……レオン、縄抜けとか出来たりする？」
「ふ、俺の辞書に不可能という文字は無い」
「欠陥品の辞書の話は良いとして、出来るの？」
「見よ！この華麗なる技！」
しゅるんと縄から抜け出るレオンを見て、そしてそんな自慢げなレオンを見て、カノンはレオンの手を握った。
「え？」
「この前服を掴んでいたら逃げられたから、手を握る事にした。こうしていれば逃げられないでしょ？」
「え、あ、うん。ソウデスネ」
「レオン、良かったね」
まったくレオンには困ったものだ。やっぱり僕が付いていないといけないらしいと、カノンは嘆息する。
そんな二人の様子を、イオがにまにまと笑ってみていたのだった。

「じゃあ、僕達も手を繋ごうか、トラン」
「うむ」
そんなイオとトランと別れて、防具屋へ。
「えーとこれとかこれは？　これぐらいで……」
店員と交渉していると、ちらちらと客がカノン達の方を見てくる。なんだろうと思っていると、小さい声で誰かが舌打ちして、
「ち、アベックで買い物に来るなよ」

え?、誰がアベッグ?、いや、そういえば恋人同士は手を繋ぐもので、今カノンはレオンと手を繋いでいて、いや、だって逃げないようにしているだけだから。
これでお願いしますと、防具を買って、慌てて外に出る。
「カノン、どうしたんだ?」
「防具を買ったから、もう手を離してもいいよね。レオンも好きにしていいよ」
「じゃあ、俺はもう少しカノンと手を繋いでる」
「何故!」
だって、それでは本当に恋人同士みたいではないか。カノンとレオンが恋人同士。カノンはそう考えると胸の鼓動が速くなり、頬が熱くなる。
「カノン、顔が赤いぞ?」
「だ、だって手を繋ぐなんて……」
「昔は繋いでいたじゃないか。子供の時。”幼馴染”なんだからおかしくないだろう?」
言われて、そうかもとカノンは思った。友達と手を繋ぐ事は良くある事だ。
「そ、そう言われてみれば、そうかも」
「何だカノン、恋人同士に見られるかもって思ったのか?」
「う、それは」
「言わせたい奴には言わせておけばいいさ。それに手を繋いでいれば、はぐれる心配も無いだろう?」
レオンのくせに、もっともな事を言うとカノンは少しむくれる。
そんなカノンをレオンが引っ張る。
「せっかくだから名所を見に行こう。それくらいは良いだろう?」
「……帰りにギルドによって、依頼を探すから、それを忘れなければ別に……」
「ようし、そうと決まれば俺、がんばる!」
「何をだ!」

そんな事を話しながら、カノンはレオンに手を惹かれて走り出したったのだった。

綺麗な花畑が広がっている。確かに美しいし、それを見るのはカノンも好きだ。だが、

「何でそこら中でいちゃいちゃと……」

カノンは彼らを見て、頭が痛くなる。あと人前でキスをするな。もっと慎み深さを持て。

そんなカノンを見てレオンが、

「いや、名所ってそういうものだから」

「……二人っきりになれる所が良い」

「え？」

「あいつら目障りだから、静かな所に行きたい」

仕方が無いなと、レオンに手を引かれたその場所は本当に人は居なくて、花畑が一望できる場所だった。

「カノン」

名前を呼ばれて振り返ると、レオンの手に一輪の花があって、その花をカノンの髪にさした。

「綺麗だよ、カノン」

「な！」

そんな事を言ってレオンが優しく微笑むから、カノンは顔を真っ赤にしてしまう。

そのままカノンの髪にレオンが触れて、カノンは急いで逃げ出した。

けれど手を握ったままだから、すぐ引き寄せられて、カノンは何にが何だか分からなくなる。

顔が熱くて頭がぐるぐるして、まともにレオンの顔が見られない。

「どこにも行くなよ？」

「え？」

「消え入りそうに綺麗だったから、不安になった」

「……もう、ギルドに行こう。やっぱり早めのほうがいい依頼が有ると思うから」
「カノンがそういうならそうかもな」
レオンがすぐに納得したように頷く。だからカノンはほっとした。
自分は魔王だから、いずれレオンの前に敵として現れるだろう。
けれどそのとき自分は本当に……カノンは、小さく溜息をついたのだった。

「以前来られませんでしたか？　あ、その人は赤い目でしたね」
カノンを見た受付の人が、そんな事を言うのでカノンは心の中で思った。
自分みたいな者は、引きこもりになっている父様くらいだろう。失礼な。
そして依頼が一つ。
「泉の水を汲んでくるだけで、１５００リン？」
破格の値段だが、この程度ならば大丈夫だろうと受けることにした。そして、
「そういえばレオン、新しい技、どうする気だ？」
「もう決めた」
「……聞いていい？」
「見てのお楽しみだ」
即座にその技を忘れさせようとするカノンとレオンの攻防は、宿に着くまで続けられたのだった。

誤解ですか、うふふ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

しょくしゅには気よ付けろ

泉の水を汲みに、カノン達はどうしてこんなに依頼料が素敵な事になっていたのか分かった。

「つる系の魔物か」

カノンも先ほど杖を取り上げられそうになり苦戦した。だから触れればすぐに炎系の魔法で燃やしているのだが。

うにょうにょと蠢く緑の蔓がかなり広範囲に広がっていて、時に触手のように攻撃をしてきて倒しても倒してもきりが無い。

一点に集中して突破することも考えられるが、泉に着く前に触手に囲まれてしまう事だろう。

魔王としてであれば、容易にこれを突破できるのだが、さてどうしたものかとカノンが考えていると、

「カノン、ごめん」

「へっ？……わぁぁぁぁぁ」

いきなりレオンにカノンは蔓の中に放り込まれた。

先ほどから捕らえようと蔓を伸ばしてくるだけなので、特に実害は無いと言えそうなのだが。

ずるりとカノンの触れた辺りの蔓が動く。

嫌な予感がしてカノンはそこから離れようとすると、まずその動きを抑えようとするかのようにカノンの手に絡みつく。

「放せ！　やめっ！　レオン、見てないで……ひんっ」

腰の辺りに蔓が絡み付いて、そのままカノンの服の中に蔓が潜り込む。

肌に直接蔓の冷たい感触を感じて、カノンは鳥肌が立ちびくっと大きく弛緩する。

この、下等な魔物の癖にこの僕に触れようとするなんて、という怒りと、何でレオンはこんな事をカノンがされると分かっているのに放り込んだのかと悲しくなる。

更に数本の蔓がカノンに触れようと近づいた所で、
「よし、今だ！」
一斉にレオン達は攻撃を開始したのだった。
「あのタイプの魔物は餌を捕らえると、本体がそこに近づいて来るんだ」
レオンが何処か得意げである。加えて、カノンの衣服が乱されて、ちょっとエロく見えるのでよっしゃぁと思っていたりする。
だがそんなカノンは、非常に機嫌が悪い。そしてまだ蔓の魔物は沢山いる。ので、
「そうかそうか。こ・ん・ど・は、お前がいけー！」
「や、ちょっ、うわぁぁぁぁぁ」
レオンがカノンによって蔓に放り込まれた。
だが、今度は蔓の魔物の方が嫌だと言うかのように身を引いた。
それに何かレオンは思う所があるらしく、手を近づけると蔓の魔物が逃げていく。
「傷つくわー」
「それは僕の台詞だよ。何で僕はいいのにレオンは駄目なんだ。ちょっとは楽しみ……じゃなかった、レオンにお仕置き……じゃ無くて、どうでもいっか」
「カノン酷い！　こんないたいけな”幼馴染”に！」
「誰がだ！　だとしたら僕だって”幼馴染”だろ？」
「カノンはいいんだ！　俺が見たかったから！」
よし、少し再教育だ。レオンの体にたっぷりと染み入るように僕の思いを……。
「カノンちゃん、あのタイプの魔物は、受けが専門と攻めが専門がいるんだよー」
「イオ、という事は、攻め専門の魔物を……というか、レオンて攻め？」
「「「……」」」

「そもそも何で僕が受けなんだ。攻めだっていいじゃないか」
「カノンちゃん、現実は残酷だけれど気を確かに持って」
「イオ、言っている事がよく分からない！　僕は男だ！」
「ああ可愛い、本当に可愛いよカノンちゃん！」
「抱きしめて頭なでないでよイオ！　むー！」
「そうだぞイオ！そんな羨ましい事！」
「あれ、レオンもしたいの？　どうする、カノンちゃん？」
楽しそうなイオの声。そしてレオンに抱きしめられると聞いた瞬間、カノンはなんて事を言うんだイオを見た。一方レオンは、
「え？、俺に抱きしめられて頭撫でられたいのか、カノン」
と、情緒とか、顔を赤らめるとか何も無い。それがカノンには本当に悔しくて悔しくて悔しくて……。
呪文を唱えて、一匹蔓の魔物をしとめた。
「……カノンちゃん、怒ってる？」
「何が？」
冷たくイオに答えると、怖ーい、とイオはカノンを放した。
そして、そこで異変が起きる。
蔓の魔物達が道を開ける。そして何処かへとずるずると去って行く。
「……何が起こったんだ？　こちらには都合がいいが……カノン？」
「……」
カノンはいなくなった魔物の方角をじっと見つめる。
その魔力の気配は懐かしいもので、というか、父のものだ。
引き篭もり気味の父が出て来たという事から、あいつも居るのは間違いないとして。
いや、だいっっ嫌いなあいつが父を守らなければどうなるか不安で仕方ないから良いのだが。
非常に不本意だが。
――でも、今回は助かったかな。
実の所、既に町に戻ることが出来ないほどに蔓の魔物に囲まれて

いてどうしようかと思っていたのだ。
広範囲から狭められて気付かなかった。力を抑えているのが災いしたか。
それにその事をレオン達に話せばなんで分かるのかは誤魔化せるにしても、もしそれをどうにかしようとしたなら……力を隠していたこと、ひいては何故そんなに強いのかという点から記憶操作が解けてしまうかもしれない。
もしそうなったなら、”仲間”全員が敵に回る。罵倒され、カノンを殺そうと襲い掛かるだろう。
――レオンに憎しみの篭った目で見られて、剣を向けられる……そんなの、嫌だ。それに、イオにトランだって短い間だけれど一緒にいて、もっと僕はここにいたいと思った。
確かに魔王と襲った時はただ利用するためだけのつもりだったのに、確かにあの時はそんな目で見られても何とも思わなかったのに、今は、少しでも長くその時が来なければいいとカノンは思ってしまう。
戸惑うような仲間達。そこでイオが、
「んー、なんか変な気配を感じる……カノンちゃんは？」
「僕は良く分からない。でも、これで依頼は簡単にこなせそうだね」
「……そうだね。じゃあ、急ごうか」
そう、にっこり笑うイオが、カノンに見えない位置でレオンとトランに目配せするのをカノンは気づきもしなかった。

しょくしゅには気よ付けろ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、クリスマスに出来たらなと思っています。

よろしくお願いいたします

隠したものはばれている

無事綺麗な泉の水を汲んで、町に戻ろうとした時、魔物の移動が始まった。
「カノン！」
一番初めにカノンが分断される。レオンの目がいつになく鋭くなり、蔓の魔物を切り裂いていくが次から次へと湧いてくる魔物には対処できない。と、
「レオン、心配しないで！　後で合流できそうだから！　僕は別の道で町に戻るよ！」
「……分かった」
レオンがあっさり諦めてくれたのには、カノンはほっとすると同時に、胸の中でもやもやしたものを抱える。
大丈夫だと言って信じてもらえるのは嬉しい。それだけカノンが信頼されていると言う事だから。
でも、それを押し切ってカノンを助けようとしてくれたら良かったのに。
――何を考えているんだ、僕は。
本当にレオンといると調子が狂う。かといって嫌なわけではなくて、むしろ、一緒にいたい。
何だろう、これ。
自分の気持ちと理性が一致しない。気持ち悪い。
そこで気配を感じた。懐かしくて、そしてカノンが大好きな魔物の気配。
「カノン」
そこで名前を呼ばれて、カノンは本当に嬉しそうにその声の主を見た。
「父様！」
そこに居たのはカノンにそっくりの、けれどカノンよりも気弱そ

うで、けれど優しそうなカノンの父だった。
　そのままカノンは、抱きつくと、父は幼子をあやすように頭を撫ぜたのだった。

「今度は俺が分断されそうだな」
　カノンが見えなくなった後、今度はレオンがイオとトランが分断されかかっていた。
　剣を仕舞い込んでレオンは溜息を付く。
「トラン、イオ、お前達は先にギルドに依頼のものを届けて、宿に戻っていてくれ。どうもこいつらを支配している何かは、カノンだけではなく俺にも用があるらしい」
「……レオン、カノンちゃんならともかくどうしてレオンまで……」
「イオ、レオンが本当はどれ程強いか、俺達は知っているだろう？」
「トラン……」
「そういうことだ。いざとなったら強行突破するから問題ないさ。心配してくれてありがとう、イオ」
「一応僕達の勇者様だからね」
　一応は余計だとレオンがイオに毒ずく。そして気配が遠のいて行くのが分かった。
　それを不安そうにイオが見ているので、トランが手を引っ張って歩き出す。
「……カノンがレオンを気に入っているから、悪いようにはならないだろう？」
「それはそうだけれど」
「イオは、カノンの事をそう思う？」
「初めは怖かったけれど、今は平気。むしろ可愛いと思う」
「俺も同感だ」
「……」
「……」
「トラン、浮気は駄目だよ？」

「イオこそ」
「……」
「……」
「レオン、カノンちゃんと両想いになれるといいね」
「そうだな、それが一番良いかも知れないな。……所で依頼料でお酒を少し買おうか」
「あ、それいいね。つまみも買っていこうか」
そんなトランとイオの、超嬉しそうな話声が聞こえたわけではなく。
カノンはそこはかとない嫌な予感をその時感じたのだった。

「貴方ですか？　僕を呼んだのは」
「ああ、そうだ。いや、敬語を使った方が良かったかな？」
へらへらと笑う、赤茶色の髪の男。美形であると同時に、この雰囲気はホーリィロウに通ずるものがあり苦手だ。
そして笑っているのに、緑色の瞳はまるで値踏みするかのようにレオンを見ている。
だから、レオンはこちらから仕掛ける。
「魔物を操れるのは魔王のみと聞いています。貴方は魔王ですか？」
「私が魔王に見えるかい？」
何処か余裕めいた笑みを浮かべる彼に、レオンは首を横に振り続ける。
「ただの人間にしか見えません」
「ふむ、では魔王は？」
「一昔前に倒された魔王カノンカースが最近になって復活したと聞いています」
「魔王は復活したと本当に思うかい？」
「そもそも倒されていないのでは？」
「……」
「……」

「君は何処まで知っているんだい？」
「その前に、貴方の名前はレイルでよろしいですか？　かの魔王、カノンカースを倒した勇者」
そこで彼、レイルは楽しそうに笑い出した。
「君に隠し事をしても仕方がなさそうだから、本当の事を言うよ。いかにも、私は勇者レイルだ」
「やはりそうですか。そして俺が誰なのかも、貴方は見当が付いているのでは？」
「そうだね。それに君、カノンの記憶操作が効いていないだろう」
「ええ、初めから」
言い切ったレオンに、思案するようにレイルが問う。
「……何で一緒にいるんだい？」
「カノンを自分のものにしたいからです。そして、逃がすつもりもありません」
きっぱりとレオンは言い切った。それが本心なのだから。
ずっと欲しくて、必ず迎えにいくと決めていたから。
初めに半殺しにされた時、自分の記憶の中の彼、それが成長した姿に擬態して襲ってきたのだと思った。
なのに、目を覚ませば本当に成長した彼がいて。
でも記憶操作が効いていないと分かれば、きっと何処かへ行ってしまうから。
だから気付かないふりをして一緒に居た。
一緒に居たカノンは昔と同じで、気が強くて優しくて、強くて綺麗だった。
だから少しでも、カノンがレオンを気にするように色々色々手を打っているのだ。
もう逃がすつもりなんて無い。
そんなレオンの心中を察してかレイルが、
「そうか、私と同じか」
と言った。その言葉にレオンは不安を覚えて、

「……貴方もカノンを？」
だが、それは杞憂に終わった。レイルは首を困ったように横に振り、
「いや、私はカノンの父、トリューカースの恋人だ。そしてカノンはファザコンで……意味が分かるだろう？」
「カノンを落とすのを協力して頂けると、そういう事ですか？」
「ああ、トリューカースを襲おうにも、毎回カノンの食事に睡眠薬を入れないといけなくて」
困ったものだと笑うレイル。
レオンはとても良い先輩であり、協力者を手に入れた。それにレオンに協力する事が彼にとっても利益になる。これはいい。
だからまずレオンは、
「その、カノンの父をどうやって落としたのですか？　僕もカノンを落とす参考にしたいのでぜひ教えてください！」
「多分参考にならないと思うよ？」
「それでも良いです！　俺は少しでもカノンに関することが知りたいから」
そうすれば、カノンの心を乱す新しい方法が見つかるのだから。
少しずつ少しずつカノンの心をレオンは侵食して、気が付けばレオン無しではいられなくなるまで追い詰めなければならないのだから。
そんなレオンの情熱に昔の自分を思い出すかのようにレイルは目を細めて話し始めたのだった。

隠したものはばれている（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は、本日１０：００となっています。よろしくお願いいたします

子供はつらいよ（1）

魔王城にて。

「いいですか、父様！　これから父様の食料やら何やらを買って来る、ついでに採ってきますから、絶対誰かが来ても出ちゃ駄目ですよ！」

「分かっていますよ、カノン」

「……一応魔物とかを使って、人間を攻撃しているので、勇者やら何やらがそこらへんうろついているから、父様は相手しなくていいですからね！　歴代最弱魔王なのですから」

「分かっています。でも最弱と言われるのは心に響くかな……」

「ああ、ごめんなさい、父様。そういうつもりではなかったのです。でも、父様は綺麗だから悪い奴らに何かされないか心配で……」

「カノンは心配性ですよ。一応普通の魔物よりは強いのですから。ほら、もう行きなさい」

心配そうなカノンが、フードをかぶって顔が見えないような服装でもう一度振り返って、走り去る。

そんなカノンが居なくなって、彼の父であるトリューカースはこそこそと遠見の水晶玉を取り出して覗き込む。そこには一組の勇者達が映し出されている。

随分前から、ほんの気晴らしに外を見ていた時に見つけた彼ら。

その勇者にトリューカースは目を惹かれた。

赤茶色の髪に、緑の瞳の男。

手に入れたいと思った。これほど欲しいと渇望したのは、トリューカースは初めてだったかもしれない。

けれど現魔王で過保護な息子が、そんな事を許さない事は分かっていた。

だから、こう機会を伺って今日という日が来たのだ。

そもそもトリューカース自身だって、弱いとはいえ元魔王なのだ。

弱いとはいえ、そこら辺の魔物よりはずっと強い。
それに歴代魔王は以前から、愛玩の為に勇者を捕らえることもしばしばあった。
だから自分だってそれをしてもかまわないはずなのに。
以前カノンにそれを話したなら猛反対されたので、今回は黙ってする事にした。
そんなわけで、かの勇者達の前にトリューカースは姿を現して捕らえようとしたのだが。
思いのほか連携プレイやら何やらで強い。しかも顔を隠したフードが取れたと単に更に彼らの勢いが増した。
力では勝っていたはずなのに、分が悪いとトリューカースは判断してその場を逃げ出した。けれど、
「逃がすと思うか？」
そんな笑いを含んだレイルの声と共に、魔法をくらってしまう。
そのままトリューカースは地面に倒れた。
起き上がる事が出来ず、もがくように体を起こそうとするが体に力が入らない。
殺されると、この時初めてトリューカースは怯えた。カノンの忠告をきちんと聞いておけば良かったのに。
足音が近づいてくる。
そのまま乱暴に仰向けに転がされて、首筋に剣が突きつけられる。
その剣の主は、トリューカースが欲しいと思ったレイルだった。
仕方ないと、そして自分が欲しいと思った者の手で殺されるならばそれも一興ではないかと自分を慰める。
そこで、レイルが酷薄な笑みを浮かべてトリューカースに問いかけた。
「このまま殺されるか、それとも私の物になるか、好きな方を選べ」
その意味を考えて、トリューカースはぞっとした。
殺されるのは、嫌だ。
けれど彼のものになって、一体自分はどうされてしまうのだろう。

顔を蒼白にして震えだすトリューカースに、レイルは追い詰めるように続けた。
「後三秒以内に決めろ。私は気が短い。もしも答えないのなら、殺す」
3，2，1と数えられて、堪らずトリューカースは叫んだ。
「貴方の……ものになります。だから……」
許してと、トリューカースは震える声で答えた。それにレイルが満足そうに頷いて、剣を引いた。そして、
「あ！」
「歩けないだろう？　お前は私のものだから、連れて行ってやる」
抱き上げられて、トリューカースはレイルに抱き上げられたのだった

人間の使う転送陣を利用して、近くの人の村へ。
とられた宿で、彼の名前をまだ聞いていないと、レイルは思い出す。
「お前、名前は？」
「……トールです」
とっさにトリューカースは嘘を付いた。もしも現魔王の父だと知れたら、カノンに迷惑がかかってしまう。
それにそうなったなら、自分は今度こそ殺されてしまうかもしれない。いや、殺されるよりも酷い事をされるかもしれない。
だからトリューカースはトールと名乗る。
けれど名乗ってすぐに、トリューカースは少し後悔した。
「そうか、トール、というのがお前の名前か」
レイルがそう微笑んだから。その笑顔にとても惹かれて、トリューカースは自分の名前を呼んでほしいと思ってしまう。
けれど一時の感情で、名を言うわけにはいかない。
そして、トリューカースはそのままレイルに抱きしめられて、その日は眠ってしまったのだった。

トリューカースは首に鈴の付いた首輪を付けられる。居場所を示す鈴と、力を封じるアイテムだった。
それを除いては、トリューカースの扱いはまるで恋人かなにかのようだった。
トリューカースが偏食家で果物しか食べないのを知ると、それらを手に入れてくれたり、魔物と遭遇した時もトリューカースを庇って前へ出たり、悪い奴に声をかけられると怒ったように手を引いてつれて帰られたり……優しい。
レイルのものだというのに、壊れ物を扱うかのように大事にされている。
するのはキスと抱きしめられて眠るだけ。こんな心地よく甘くされては、そして見初めたレイルにそんな事をされては、トリューカースは魔力を封じられる以上に逃げられない。
最近、レイルが愛おしくなってしまい自分からキスをしてしまった。
その時のレイルの顔があまりにも焦ったような子供のようだったのでつい笑ってしまうと、そのまま激しくキスをされてしまった。
あれ以来特にトリューカースに優しい気がする。
もう少しだけ、レイルの傍にいたい。
本当は愛していると言いたい。けれど、言って拒まれたならトリューカースは立ち直れない。
それでも諦める事ができなかった。体を好きにさせてもいいから、傍に居たかった。
だから、未だにレイルの傍にトリューカースはいる。
カノンには心配しないよう、場所が分からないよう、けれど安否だけ分かるように魔法で連絡を取っていた。
そんなある時、トリューカースが以前他の者と関係を持っていた事がばれた。
怒ってしまったレイルとしばらく口も利かないでいたある時、目

を覚ますとそこにはレイルの姿は無く。
身支度を整えフードをかぶり、魔物ということがばれないようにして宿の人に聞くと魔物の討伐に出かけたという。
妙な胸騒ぎを覚えて宿で待っていると、瀕死になったレイルが運ばれてきた。
死なないでと泣き叫びながら、トリューカースは自分の全ての魔力を使ってレイルを癒す。
その時、『愛している』とレイルが言った気がして、トリューカースは胸が締め付けられそうだった。
死なせはしない。だってトリューカースは、レイルが本当にそう言ったのかを確かめなければならないのだから。
そのまま魔力の使い過ぎでトリューカースは意識を失ったのだった。

子供はつらいよ（１）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

この回と言うか次回なのですがムーンライトノベルズの方はＲ１８方向に加速しております。１８歳以上の方はそちらも楽しんでいただければ幸いです。

次回更新は、本日１３：００となっています。よろしくお願いいたします

子供はつらいよ（2）

レイルは怒りに震えていた。
アレほど初心な雰囲気を纏ったトールに触れた初めての男が自分で無いなんて。
自分だけのものにしたかったのに。けれどあの上手なキスも他の男が仕込んだものだったのだろうか。
そう考えると、レイルははらわたが煮え返るようだった。
許せなくて許せなくて、けれどトールのことは諦め切れなくて。
トールの全てをレイルは自分自身で塗りつぶしてしまいたかった。
そんな事を考えていたためか、いつもなら負わない怪我を負って瀕死の重傷を負ってしまう。
「死なないで！」
そう叫ぶトールの姿に、レイルは笑みを零す。声を出す事もできず、小さく唇で『愛している』と呟くと、トールが大きく目を見開いたようだった。
伝えるべきことは伝えたと、レイルはそのまま意識が徐々に薄れて……次に目を覚ました時には、自分のすぐ傍にトールが眠っていた。
その顔がとても綺麗で、そういえばトールの顔をこんなにまじまじと見たのは久しぶりだと気付いた。
そこでその双眸が揺れてゆっくりと目が見開かれる。
その瞳がレイルを映した瞬間、大丈夫ですか、レイルと叫んだ。
その様子があまりにも切羽詰っていて、そして、些細な事に嫉妬していた自分にレイルは笑ってしまう。
「僕は……本当に、貴方が死んでしまうかと……」
「ごめん、トール」
そんなトールにキスをして、首につけていた首輪を取る。もう、こんなものは必要ない。

レイルは決めたから。
「トール、今更だが、私の恋人になってくれないか？」
「……その前に、『愛している』と言ってもらえませんか？」
ねだるように微笑むトールに、レイルは勝てないなと苦笑して、
「愛しているよ、トール。だから私の恋人になってくれ」
「はい。僕も貴方の事を愛しています、レイル」
そう、レイルとトリューカースは唇を重ねたのだった。

「僕には幼馴染の四人がいまして、その四人の誰かと子をもうけなければならなかったのです。けれど結局四人とは出来なくて」
彼らはその時は優しくしてくれた。いｙ、そのときまでは優しかったと思う。
結局、女性の魔族との間で子を産み、そして彼女にもそれだけの関係だからと言い切られた。
本当は彼女の事が、少しだけトリューカースは好きだったからそれはとても辛かった。
そんな、悲しそうなトリューカースをレイルは抱き寄せる。
「そうか、辛い事を聞いてしまった」
「いえ……その後、その四人にそれでも愛していると軟禁されかけて、それ以来ずっと引きこもっていたのですが、貴方に惹かれて出て来てしまいました」
「そうか……その四人に報復を」
「……一応幼馴染なのです。昔からずっと遊んでいた……だから、酷い事をしないでください」
ただし遊んでといったお願いをするたびに、彼らも自分の願いをかなえるよう要求した。
あの四人の誰と比べてもトリューカースは弱かった。
それでも優しかったのだ、昔は。
遊ぶ代わりにキスをねだられて、幾度となくそれをした。
決定的な亀裂は、彼らの別荘に軟禁されかかった事。

「貴方が悪いのです。我々の四人の中から選ばなかったから」
劣情と怒りと悲しみが入り混じった声。
そこまで自分を何故求めるのか、魔物だから魔王に惹かれている、ただそれだけのはずなのに。
そんな憂いだトリューカースび優しく囁きかけるように、レイルはいった。
「なら、これからのお前の未来は、私のものだ。もう誰にも渡しはしない」
「うん……」
レイルの盛大な告白に、トリューカースは本当に幸せを感じて優しく微笑んだのだった。

子供はつらいよ（２）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は、本日１８：００となっています。よろしくお願いいたします

子供はつらいよ（3）

最終的に魔王城にたどり着いた。
暗雲漂う中、聳え立つ灰色の城はいかにも巨大な力を持つ魔物が、潜んでいるかのように見えた。
ちなみにトリューカースの住居でもある。
しかし、未だに本当の名前を告げる勇気がなく、トリューカースはトールという偽名を使っていた。
気が付けば仲間としても、レイルの恋人としても、レイルの仲間達の信頼を勝ち取っていた。
それが居心地が良くて、そして結局今回の魔王の件は四天王は関わっておらずそちらに行かずにすんだことから、意外に短い期間でたどり着いてしまった。
中にいるのはカノン一人で、殺傷性の高い罠がある道が幾つもあるはずだった。
もちろんの事、その全ては城の主であるトリューカースも知っている。
気が引けるのは、城を空けすぎてカノンが怒っているだろうなという事と、恋人のレイルをどう紹介しようかという点である。
凄く怒られそうな気がする。
「トール、行くぞ。大丈夫、私が守るから、心配するな」
レイルが本当に優しくて、トリューカースはうんと頷く。そしてフードをより深くかぶって、はたから見てトリューカースだと分からないようにする。
カノンには悪いが、レイル達を殺させるわけにはいかないから。
中に入ると、探査の魔法を使って、どの道が良いか分かるも、最後の三つの扉の前で迷う。
ここを通れば魔王の玉座の広間に着く。
けれどそれがどれか分からないようだ。そしてあてずっぽうで危

険な道を行こうとするレイルを止めて、不思議そうなレイル達にトリューカースは微笑んで、どの道を行けばいいのかを教えたのだった。

レイルは、トールがまるで道を知っているかのような行動に出た事に、驚きを隠せなかった。

「トール？」

名前を呼んでも微笑むばかり。けれど罠が無いことから正しい道だと分かる。

やがて大きな扉の前にたどり着く。

この先に魔王がいるのだろう。

レイルは大きく深呼吸して扉を開こうとして、扉が自分から開いた。

レイルが驚いたのはその後だった。

そこから、引きつった笑みの、トールにそっくりな、年はトールと同年代の見かけの頭に角を付けた魔族が顔を出したのだ。

おそらくは魔王だろうと、レイルは見当をつける。

とっさにレイルはトールを自分の背に隠す。

何か言いたそうにトールはレイルの後ろでしていたが、それよりも早く目の前の魔王がレイルを指差して、

「その人から離れろ！」

と言った。年が同じくらいに見えるという事は、彼がトールの幼馴染だろうか。

近い親族で婚姻を結ぶのは、貴族でも良くある事。

つまり彼が、トールに酷い事をしようとした男か。

そう考えた瞬間レイルは、彼にトールを渡すまいと心に決める。

今にも飛び掛って殺してしまいたい怒りを抱えながらレイルは、

「嫌だね、お前の指図は受けない」

「何だと？」

言い返されるとは魔王は思っていなかったらしい。

それはそうだろう、魔族の長たる魔王が人に指図されるなど、そんな滑稽な事があるとは思えない。
険を増す魔王に、レイルは更に続けた。
「そもそもあいつは俺のものだ」
その言葉に、目の前の魔物は酷く怒ったようだった。
パクパクと口を開いてそれから一度ぎゅっと怒ったように口を結んでから、
「お前、お前は一体……」
「彼の恋人だ。他に何か？」
「何……だと」
驚いたような、衝撃を受けたような目で、トールを見る。
だからそれに対して何か言おうとするトールの顎を捕らえて、レイルは唇を重ねた。
長くたっぷりと見せ付けるようにキスをしてから、レイルは魔王に向き直り、
「こういう関係だが、何か？」
と聞き返す。
魔王は言葉も出ないように、俯きながらわなわなと怒りで肩を震わせている。
それにレイルは優越感を感じた。その時は。
「……認めない」
「私はお前に認められなくてもかまわないが？」
その言葉に、俯いていた魔王が顔を上げる。
怒りで顔が真っ赤になって涙目で。
あれ、この顔はどこかで見たことがあるようなとレイルが思った次の瞬間、
「お前なんか……お前なんかに……父様はやらない！」
父様と聞いて、レイルはトールを見た。
トールがばつが悪そうにレイルから目を背ける。
「え？」

レイルは、間の抜けた声を上げたのだった。

「改めて自己紹介を。僕は、前魔王のトリューカース、そして彼が息子の現魔王カノンカースです」

「……子持ち……しかも、前魔王……」

「黙っていてごめんなさい。でも、嫌われたくなかったから……」

「トール、いや、トリューカース……」

「ようやく、本当の名前を貴方に呼んでもらえた……嬉しい」

何処か甘い雰囲気の二人に割って入ったのは、彼の息子、カノンカースだった。

「お・ま・え……認めない、僕はお前なんか絶っっっ対に認めない！」

まさか子供だとは思わなかったので恨み半分で挑発した事を、レイルは反省した。

反省したので懐柔しようにも、カノンカースは取り付く島も無い。そこで、

「カノンと一定の条件の下で勝てば、言う事を聞いてもらえますよ？」

「どういくことだ？」

「父様！」

焦ったようなカノンカースに、これは勝算があるかと思いレイルは問い返す。すると、

「もともと、今までの勇者は誰一人として魔王を倒せていないのです。力が強すぎて」

「でも、トリューカース、お前は……」

「僕は歴代最弱ですから、けれどカノンは普通の魔王と同程度の力を持っています。だから、レイル達が幾ら強くとも、カノンが本気を出せば一瞬で消し炭になってしまうのです」

ちらりとカノンカースを見ると、胸を張って偉そうだった。

その子供のような仕草が逆に威厳の欠片もなくしていると、本人

は気付いているのだろうかとレイルは思って、黙っておこうと決めた。それは良いとして、
「けれど魔王側の理由から人を滅ぼすのは都合が悪いので、ある条件の下で勝ったならば、封じられた、倒されたとして要求を飲むことになっているのです。例えば、しばらくは人間達を襲わないようにさせるとか」
「なるほど、つまりそれで勝てば、魔王を倒した事になると同時に、トリューカースが私の恋人という事が子供公認になるわけか」
「……」
「……」
「……レイル、嬉しい」
「トリューカース……」
甘い雰囲気になる父親達に、カノンカースが割って入った。
「まだ僕はその条件だと決めていない！」
そんなカノンカースに、トリューカースはそっと手を握って、
「カノン、僕は、レイルの事が好きです」
「父様……」
「だから機会を与えてください。駄目な父親のお願いです。だから……」
「父様は、駄目なんかじゃない！　優しくて、綺麗で、だから僕は……」
守ろうと思ったと言おうとして、カノンカースは口をつぐんだ。父であるトリューカースが自分が弱い事を気にしていると知っていたから。
だから黙って、そんな父が選んだレイルと言う勇者を見つめる。
確かに、極端なクズではなく、そこそこ人の悪い所もある、けれど優しい人間のようだった。
戦いぶりも遠見の魔法で見ていたので、どういう人となりなのかカノンカースは知っていた。
その時、父がいることになど気付きもしなかった自分が恨めしい。

けれど、父が本当にレイルといると幸せそうだから。
だから、それを引き裂けない。悔しいが。
「分かった、勝負の方法は、僕のこの角を奪うこと」
「それは直に生えているものでは？」
「何代か前の魔王が威厳をつけるために、付け始めて僕もそれにしたがっているだけだ。それで、どうする？」
「わかった、それでいい」
頷くレイルの服を、トリューカースは引っ張った。そして何かを耳打ちする。
「……そんなもので良いのか？」
「ええ、僕達魔王一族の変な呪いの様な物で」
「……分かった」
早くしろと叫ぶカノンカース。
そして耳打ちされたように、それをそこら中にばら撒いて、本当にカノンカースは引っかかったのだった。

子供はつらいよ（３）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は、本日２１：００となっています。よろしくお願いいたします

外より内の方が好きなんです

「何に引っかかったのですか？」
よし、早速カノンに使ってやろうと決めてレオンはレイルに問いかけた。すると、
「バナナの皮だ」
「え？」
「どういうわけか、魔王の一族はバナナの皮が天敵らしい」
「……間抜けですね」
「そういうところも可愛いと思わないかい？」
「確かに」
レオンとレイルは話してみて、似たもの同士だと感じた。これは中々、お互い良き協力者となれそうだ。
「それで君は、やはり？」
「ご想像の通りだと思います。ただし俺にはあの力は無いので、出来損ないですが」
「……そんな事は無いと思うが……所で、先ほどの話しは参考になったかい？」
「いえ、全然」
あっさり首を横に振るレオンに、レイルはおかしそうに笑った。
「そうだろうな、ただ、トリューカースがその四人――というか四天王の魔物達ではあったのだが――に惚れられてた事は話したと思うが、もしかしたなら……」
「カノンに手を出してくる可能性があると？」
「ああ。それに元々全ての魔物は魔王を敬愛……強い恋慕のようなものを抱くものらしいから、それとは関係無しに襲いに来るかもしれない」
「カノンは俺の嫁です。誰にも渡しません」
「そうそう、そのいき。カノンは本当にファザコンだから、トリュ

ーカースに抱きついて見えない位置で、私に向って舌をだしたり、『将来は、父様のお嫁さんになる』とか言っていて……」
聞いた瞬間、レオンの額に青筋が浮かぶ。カノンを俺の嫁発言しているだけに、レオンはカノンに関しては心がとても狭かった。
「分かりました。カノンが俺以外に目が行かないようにしておけばいい、という事ですね」
暗い光を瞳に宿しながらくくとレオンは暗く笑う。
そんなレオンにレイルは昔の自分を重ねつつ、彼の協力が自分にとっても都合がいいと微笑む。
「そうして貰えると助かるよ。けれど、君はカノンの何処に惚れたんだい？」
「優しくて気の強い所です」
「それは、見た目に一目ぼれしただけでは分からないよね。君は一体何処でカノンに会ったんだい？」
レイルが探るようにレオンを見て、それがレオンにはおかしく感じる。
この人は覚えていないのだろうか。
「以前貴方は、王都近くのシルスの村にいませんでしたか？　カノン達と一緒に」
予想外であったらしいその答えに、レイルは目を瞬かせて、思い出したというかのように手を打った。
「……ああ、あれが君か。そうか、それで……」
「多分カノンは覚えていないと思います。でも、俺はカノンの事があの時からずっと好きだったから」
「そうかそうか、あのやんちゃだった君が……あれ、お忍びで？」
「ええ、お忍びで」
「よく取っ組み合いの喧嘩をしていたものな。いつそうなったんだい？」
「お忍びで一時的に来れなくなった時告白したんです、一応。もっともはじめて見た時、貴方と一緒で一目惚れしたのですが関わって

いく内に、その内面に惹かれて……あいつ以上に惹かれる者に出会わなかった事もあるのですが、ずっと好きだったから、絶対欲しいと思ったから」
「そうか、それでかな。カノンがある時から特に私達に口を出さなくなって、もともと人間に甘めだったが以前よりも人間への考え方を改めたようだったから。それに、忘れていないと思うよ。カノンはその時の事今も覚えている」
「……その割には俺達を全力で半殺しにしてきたような」
「いや、力が強くとも、間抜けだから」
「そうですね、間抜けですものね」
それで済まされてしまうのも、カノンを見ていると納得がいく。
本当にどうしてこう抜けているのか。そうそう、抜けているといえば、
「そういえばカノンが、キスを百回すると子供が出来るといっていたのですが……」
「え？　冗談……そういえば、トリューカースにキスするたびに、子供が出来るとか騒いでいたような気が」
「多分本気ですね……分かりました。俺が一つ一つ教えていきますよ」
「頼む。さすがにそれは不味いだろう。ああ見えて、百歳超えているし」
百歳越えと聞いて、レオンは何となく悔しくなる。自分が追いつけないくらい年上なのが、何となく嫌だ。
そして、それほど年上にもかかわらず、あの状態とはとレオンは思う。
「何であんなに純真というか……中途半端に無垢なのですか？」
「いや、色々あって引きこもりにトリューカースがなって、カノンの先先代魔王が亡くなってから、カノンが食料の調達やら、時には人間に扮してギルドに依頼を受けに行っていたらしい。トリューカースは果物しか食べないし」

「それで中途半端に人間なわけですね」
けれどそれならば、そこから切り崩していくのもありかもしれないとレオンが計算していると、
「それでもカノンは魔物だよ。トリューカースもそうだったが、そういった衝動に駆られることがある。特に満月の夜や、好きな者の前ではね。君はカノンに意識されているようだから、気よつけた方が良い」
魔物だから気よ付けろ、確かに彼らの闇は光を求め、光に属する人間を襲う。しかし、
「でも貴方は無事ではないですか」
それは矛盾だ。現に、彼はカノンの父に傷つけられることなく、そしてカノンに何かされるわけでもなく今レオンの目の前にいる。
けれど、それにレイルは肩をすくめた。
「満月の夜は、その前日に私はトリューカースを襲って、魔力の殆どを搾り出してしまうから。それに、トリューカースは偏食だしね。それで大丈夫なんだ」
「それでもカノンと一緒に暮らしていたんでしょう？」
「……あいつ、私の事が本当に嫌いらしくて、満月の夜に出くわした時に舌打ちされた。どうも嫌い過ぎると逆に大丈夫らしい」
「それは……良かったですね」
「ああ、良かったとも。だから、気よ付けろ。傷つくのはお前だけじゃない。カノンもなのだから」
「肝に銘じておきますよ」
「大体、話はこれでおしまいかな。君がどんな人間か分かって良かったよ。仲が悪いとはいえ、カノンはトリューカースの息子だから、気にかけていたんだ。そして、私も出来る限りお手伝いをさせて頂くよ」
「ありがとうございます。その時はよろしくお願いします」
「ついでにもう一つ、面白い話があるが、聞いておくか？」
「え？」

レイルはそう、いたずらっぽい笑みを浮かべてその事をレオンに話したのだった。

外より内の方が好きなんです（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は、本日２３：００となっています。よろしくお願いいたします

常識的に考えて

「カノン、久しぶりですね」
「父様！　元気そうで良かった！」
「ええ、レイルが色々と面倒を見てくれますから」
そこでぷいっとカノンは不貞腐れたようにそっぽを向く。その様子は、昔から可愛いままだ。
そんな我が子の様子を見ながら、トリューカースは、
「どうですか、一緒にいる勇者達は」
「レオンは変態だけど良い奴だし、イオもトランも、優しいし、とても良いパーティに潜り込めたと思います。ただ……」
「ただ？」
「ただ、最近ふと思うのです。彼らを危険な目に合わせるのではないかと」
「それは、カノンの選んだ彼らが弱いと？」
「そんな事ありません！　確かにまだ弱いけれど、これからきっと、もっと強くなります！」
「それならば、カノンが守ってあげればいいでしょう？　カノンは僕なんかよりもずっとずっと強い力を持っているのですから」
そうあたまをなぜる父に、はいとカノンは素直に頷いた。
本当に穏やかで優しい気持ちになる。こんな父をおいて城から出てきたのは、カノンがある話を聞いたからだった。
「四天王の一人風の王の息子と会いましたが、特にその気配は無いように思えました」
「デマだと？」
「いえ、まだ一つしか行きませんでしたから」
「……行くのを止めませんか？　僕はカノン、貴方が何かされないか心配です」
「別にキスされる程度で特に何かをされたわけでは……」

そこでトリューカースがカノンの腕を掴んだ。
「帰りましょう。やはり、カノンをあいつ等に会わせる訳にはいかない！」
「ま、待ってくださいキスならレオンとも……」
そこで、トリューカースが足を止めた。そしてくるりと本当ににこやかな笑みを浮かべて、
「カノン、そのレオンさんという人にもキスされたのですか？」
有無を言わせない、その迫力がある笑顔にカノンは危険を察知した。
だから話をそらす。
「そういえば、どうして父様は、キスを百回すると子供が出来ると嘘をついたのですか！」
「……どうしてそれが嘘だと？」
「レオン達から聞きました！」
「……余計な事を」
「え？」
「いえ、でも、カノンも一回城に戻っては？　それにもうカノンが危ない事をする必要が無いでしょう？」
「……父様、先ほどと言っている事が……」
「……飢えた野獣どもに、僕の可愛い可愛いカノンを渡してなるものか」
「えっと、父様？」
いつもと様子の違う父に、カノンは不安を覚える。けれどそれ以上にレオン達と一緒にいられなくなると考えると、胸が締め付けられるようだった。
「あの、父様。僕はもう少しレオン達と一緒にいたい……」
そんな熱心な息子の様子に、トリューカースはある事に気づいた。気付いたので、連れて帰ろうと思った。だから、
「カノン、それほど強くなりそうな勇者ならいずれ魔王城に来るでしょう。その時手に入れるのは駄目なのですか？」

確かに勝つにしても負けるにしても彼らを、特にレオンを手に入れることは可能だ。
勇者を手に入れた魔王など自分の前にも多々いる。
けれど、そういった手に入れたい、とは自分はちょっと違う気がした。
「……一緒に居たいんだ。もう少し彼らと一緒に、馬鹿みたいなやり取りしたり、笑ったりしたい。こんな事、初めてなんだ」
「カノン……」
そこでトリューカースは思い出す。カノンは、自分と違い魔族とも交流なく魔王城に二人だけでずっと居た。
せいぜい誰かと接点を持ったのは、レイルと一緒にトリューカースが新婚のままごとをした時に、子供に化けて付いて来て、その時に他の人間の子供達と遊んでいた時位だろう。
自分のせいでカノンのそういった時間を犠牲にしていたとトリューカースは初めて気付いた。
そして今、カノンは彼らと一緒にいたいといっている。だから、少しくらいならばかまわないのでは?。
「……分かりました。もう少しだけ、けれど身の危険を感じたなら帰ってくるのですよ?」
「父様、ありがとう!」
「それと、満月の夜は気よつけるのですよ?　彼らを傷つけないように」
「はい、今までだって大丈夫ではありませんか」
確かに今までは大丈夫であったが、カノンはレオンという人間に惹かれている。
あの魔物の衝動、を抑えきれるだろうか?。
「大丈夫です。それにそんな事をすればきっと僕が後悔してしまいます。それに、人間なんて食べる気もしません。昔から。父様だってそうでしょう?」
「基本的にある一定以上の魔族は人間なんか正気の時は食べたいな

んて思いませんから――アレは別ですけど――だから、大丈夫かもしれませんね」
父親が納得してもらえて、カノンはほっとした。そして、満月の夜の衝動に不安を覚えるものの、大丈夫だと自分の力を過信していた。
以前に満月でもないのに、レオンの血を舐めとり甘く感じた事、酒を飲んでいた時、キスをしてレオンの魔力を奪い取った事。どちらもレオンだから、なのにカノンは気付かなかった。
そこで、ふとトリューカースが思い出したかのように付け加えた。
「そういえば最近僕達にそっくりな、赤い瞳の者が目撃されているらしいですよ？」
「……赤い瞳は、特に魔力が強いものの象徴ですよね。人にしろ、魔族にしろ」
「しかもバナナの皮に引っかかったそうです」
「……父様の隠し子ですか？」
「魔王は一代に一人しか生まれない、それは貴方も知っているでしょう？」
では一体誰なのかと考えて、それから、
「……世の中広いので、そういう人間もいるのでしょう」
「そうですね」
そしてちょっとした雑談をして、カノンはトリューカースと別れたのだった。

レイルはトリューカースと合流した。
「やはり、魔王カノンカースが目覚めたから、勇者の活動が活発になったらしい」
「それと同時に四天王が動いて……動きが関連している？　カノン……」
「だが逆に動く事で何か分かるかもしれない。城にいるだけではいざという時に対処できないかもしれない」

「それでも野獣の中にカノンを放り込むなんて……」
「会って話した限り、レオンは紳士的だと思うが？」
「カノンにキスしたのに？」
「……」
「……」
「その程度許してやろう、トリューカース」
「でも……」
「私が傍にいる、それだけでは不満か？」
黙ってしまうトリューカースに、レイルは小さく笑う。本当に、彼は寂しがりやだ。
それに、カノンだってもう子供ではない。
そして、トリューカースもそれが分かっている。認めたくないだけで。
そんなトリューカースを連れてレイルもまたその場を去ったのだった。

宿に戻ってカノンは悲鳴を上げた。
「イオ、トラン！これは一体何！」
「何って、お酒？」
「あああ、しかも依頼量がこんなに減って……どれだけ飲めば、レオン、何？」
即座に依頼料の入った袋を、レオンがカノンから取り上げた。
「ちょ、どうする気！」
「ぱあっと使うのさ、それではまた会おう、諸君！」
「ちょ、待て、レオン！　えっ！」
追いかけようとしたカノンは、何かを踏んで倒れこむ。
視界の端にはそれが黄色いバナナの皮だと分かった。
ああ、またバナナの皮かとカノンは泣きたくなる。
本当にどれだけあのレイルとかいう父の恋人にバナナの皮で嵌められた事か。冷たい床は痛かった。

そこで、カノンはレオンに抱きとめられる。
見上げるとレオンが微笑んでいて、それにカノンは見惚れてしまう。
「いつだって、転んだら抱きとめてやるから」
「あ、うん、そう、そうだね」
「”幼馴染”だから」
そう付け加えるレオンが何となく面白くなくて、カノンはそっぽを向く。
それが運のつきだった。
「と、言うわけでさらばだ！」
走り去るレオンにしまったと顔色を変えてカノンが追いかける。
そんな仲の良い二人を見送りながら、このお酒美味しいねとイオとトランが仲良く飲んでいたのだった。

常識的に考えて（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

意味が分からないよ

結局なんだかんだでレオンから依頼料を取り戻したカノンだが、半分に減ってしまったその悲しさのあまり、次の日の朝早く開くと同時にギルドに飛び込んだ。

「すみません、何か依頼は……」

「無いよ」

新聞から顔を上げずに、タバコを吸いながら中年の男が足を組みつつ短く告げた。

けれど、カノンは更に食い下がる。

「……いえ、普通一つか二つ、あるものでは？」

そんなカノンを面倒くさそうに、見上げて言葉を失ったようだった。

それからその男は小さく咳払いをして、

「昨日有名な勇者様が来て、全ての依頼をこなしてしまいしばらくそれ関係は……ああ、可愛い少年が宴会で女装して踊る依頼ならありますが」

「僕は可愛くないので無理ですね、それでは」

と、カノンはきびすを返してそこから去ろうとした。

そこで、嫌な人影を見つけた。

その人影も、カノンに気付いてものすごく嫌そうな顔をして、

「こんにちは、卑猥な体をした人……カノンさんでしたっけ」

と、カノンに喧嘩を売ったのだった。

「つまりそのような理由でカノンが女装をする羽目に？」

「油断した……まさかあの依頼が、奴らのものだったなんて。しかも挑発に乗っちゃって……何で僕は……」

そう、その嫌いな人影は僧侶、名前をイータといった。以前釘をさしておいたのに性懲りもなくカノンの前に現れて……それはいい

として。
ホーリィロウ達がちょっと楽しく宴会したいとの理由で依頼を出していて、そして僧侶のイータとカノンは気が付けば口論になっており、勝った方がレオンを手に入れることになった。
単純に売り言葉に買い言葉で言い合いしていただけのはずなのに、とカノンは頭痛がする頭を押さえた。
しかもその経緯をイオに話したら、何故か笑い出して理由を教えてもらえなかった。
ちなみにその時イオの頭に浮かんだのは、正妻と側室の骨肉の争いだったのだが、賢いイオは思っただけで言わない。
それよりも、もっと面白いことが今進行していた。
レオンが荷物から洋服を取り出して、カノンの前で広げて見せた。
「どれがいい？　フリルいっぱいのスカートに、胸元の開いた体のラインが丸見えな服、メイド服に、白衣に……」
「何故そんなものを持っている」
「イオの趣味だ」
あっさりとしたレオンのそんな言葉に、じーとカノンはイオを見て溜息をついた。
「そんな格好で踊り子は踊るものなの？」
「ううん、踊り子をやっていてファンの人から、こんな服がありますってプレゼントされたの」
「……深くは追求しないけれど、本当にどれにしよう」
「カノンちゃんはどれを着ても似合うと思うよ、そうでしょ、レオン」
「うむ」
うむじゃないだろ！、とカノンは思ったが、似合うと言われたのは……嬉しくない、嬉しくないから、全然、嬉しくないから。
でも、どんな服でもいいのならとカノンは考えて、
「じゃあ露出度多目のものがいいかな？」
その途端、レオンとイオが黙った。

カノンはまた自分が変な事を口走ったのだろうかと不安に思う。
とても冷たくて痛い沈黙の後、レオンが重々しく口を開いた。
「……カノン、ごめん、俺が悪かったから、露出を控えよう」
「でも露出をしないと、男の妄想をわざと誘っていて、一見清楚に見えるのに卑猥さを垂れ流しているような姿になるんでしょう？」
「……誰に聞いた」
「え、僧侶のイータに」
「そうか、カノン、それは嘘だからな？」
隣でイオがうんうんと頷いているので、多分正しい。
そこで、熱弁するようにレオンが続けた。
「本当にエロくないのは隠されつつ体のラインが見えている事だから！」
「つまりその姿はエロいってことだね。ありがとうレオン。君の犠牲は無駄にはしない」
一体どれだけレオンの事を見ていると思っているんだ、レオンがそんな事を考えているなんてお見通しさとカノンは思う。
ちなみにイオはにまにまと、カノンとレオンを見ていた。
そして、何故ばれたとむせび泣くレオンを尻目に、ふりふりのロングスカートのワンピースを選ぶ。
黒と白の服で頭にリボンのいっぱい付いた布と猫耳をつけるらしい。面白い服だ。
そして、カノンはプチプチとボタンをはずして服を脱いでいく。
白くきめ細かい大理石のような肌が、臆面もなく晒されっようとした所で、レオンが部屋から出て行った。
「？　レオン、どうしたんだろう」
「カノンちゃん、いつもレオンがカノンちゃんが着替える時部屋から出て行ったの知っている？」
「そういえば……でも男同士なのに？」
「白い肌が朱色に染まる所とか想像しちゃうからじゃない？」
「？　意味が分からないよ」

「そんなカノンちゃんも可愛いけれど、早くそれ着てレオンに見せてあげなよ。きっと喜ぶよ？」
「そ、そうかな」
そうそうと促して服を着せる。
胸に詰め物をするか考えて、貧乳はそれはそれでアリだと気付いて、イオはあえて提案しなかった。
そして綺麗に仕上がったカノンはそれはそれはもう。
「レオン、入ってきなよ。カノンちゃん凄くいいよ」
「本当か！」
勢いよく部屋のドアを開けて、レオンは絶句したようだった。
開いた状態で少し立ち止まって、じっと無表情にカノンを見つめる。
その視線が何処か気恥ずかしくて、顔を赤らめてカノンは俯いた。
すると無言でレオンはカノンの目の前にやってくる。
その威圧感がいつもと違う事に気付いて、カノンはレオンを見上げた。
「レ、レオン？」
その声を合図に、いきなりレオンはカノンの服を脱がし始めた。
突然のレオンの行動にカノンは固まるも、すぐに抵抗する。
やめてと暴れるたびに、長いスカートがめくれ上がり、カノンの白い生足が太ももまで露になる。
けれどレオンはそんなカノンの抗議が耳に入らないかのように、黙々とフリルのついた服を脱がす。
何処かいけないような気分になりながらカノンは、レオンの体を押しのけようとするもびくともしない。
着々と黙って、レオンはカノンの服を一枚、また一枚とはいでいく。
カノンの白い肩が、興奮しているせいか少し赤みを帯びていた。
そんなカノンにレオンは終始無言のまま、ズボン以外、いつもの服に着せ替えさせた。

「レオン、酷いよ。せっかく着たのに」
「俺がやる」
「え？」
「俺が女装する」
どうしてレオンがそんな事を言うのかカノンは分からない。
戸惑うカノンの様子を見ながら、レオンがどういった心中なのか察して、イオは一人面白そうにににまにましていたのだった。

意味が分からないよ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

明日辺り、ｗｅｂ拍手を更新できたら良いなと思っています。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

出遅れたでござる

「何故レオン様が女装をしているの！」
僧侶イータの第一声はそれだった。
そしてカノンもそう叫びたい気持ちが非常に良く分かるのだが……。
「でも、似合っているんだ。仕方が無いんだ。僕は悪くない」
本当に驚いた。レオンに服を着せて、というか先ほどまでカノンが着ていた服を着せて――身長差があるので少し足がカノンのときよりも露だが――上品な綺麗なお嬢様というか。
そんなレオンを見て、その美しさのあまりカノンはレオンを見上げたまま惚けてしまった。
レオンはそんなカノンに真っ先に歩み寄り、そのままキスをした。
「！　何を！」
「いや、見とれているようだったから、こんな美しくて綺麗な女の子がカノンは好みなのかなって。サービス？」
「いらない、そんなサービスいらないから！」
「じゃあ、この格好でその依頼をやればいいんだな？　踊るんだったっけ？」
そこでカノンが少し迷ったように一度目を伏せてから、
「……やっぱり僕が女装を……」
「え？　嫌だよ。俺、この格好気に入ったし」
「……僧侶のイータとかも、レオンの格好を見るんだよね」
カノンが何を言いたいのか、どんな気持ちなのかをレオンは分かっている。
分かっていて揺さぶっている。
だから、わざとカノンの気持ちに気付かないようにレオンは続けた。
「そうなるな。ホーリィロウ達もだがな」

「……やっぱり僕が着る！　だからレオン、その服も僕に……」
けれどその言葉に、うんとレオンは頷かない。
今カノンが持っている感情は先ほどレオンが持ったものと同じ。
それが何なのかを、レオンはカノンに一つ一つ気付いてもらわないといけないから。
気付かずに必死になって、僕がやると言っているカノンもそれはそれで可愛いとレオンが思っているのは別として。
現在、レオンだけが女装して依頼を受ける事は確定したかのように見えた。
但し、ここには悪戯っ子が一人。
「なら、カノンちゃんはこっちのメイド服にする？」
レオンとカノンの二人が、えっと言う表情でイオを見たのだった。

「ふーん、メイド服ね。一体どんなご奉仕をするんでしょうね」
ご奉仕、という言葉をとげとげしく大きな声でイータは強調する。
その意味はカノンには分からないが、僧侶のその格好に一言文句はつけてやる。
「ははは、僧侶のお前は何だ？　白い女物の服、それ結婚式に着る服じゃないのか？」
「レオン様と一緒に腕組めば、それっぽい気分が味わえると思ったのに」
「面白い冗談だな。似合わないにもほどがある」
「使用人風情が、何を言っているんだか」
「……」
「……」
しゃー、と牙をむき出しで威嚇しあう二人。それは傍から見ると微笑ましく可愛いものに見えたのだが。
機嫌が悪そうなレオンに、イオは話しかけた。
「レオン、怒っている？」
「……怒らないと思うのか？　あんな可愛いカノンが、他の奴らに

見られて」
「でも考えてみようよ。だって普通のフリルの服とメイド服の２種類のカノンちゃんが見られたんだよ！」
「それは、そうだが……百歩譲って他のやつらがカノンを見るのは良いとして、あいつ、ホーリィロウにこんなカノンを見せたくない」
「恋敵だから？」
「……答えたくない」
珍しくレオンの歯切れが悪くて、イオはあれっと思う。
そういえばこの前も知り合いのようではあったのだが、イオはレオンがホーリィロウとどのような関係なのかを知らない。
有名な、とても強い勇者様。今一番有望株で、魔王カノンカースを倒すのも彼だと噂されている。
そんな勇者が、無名というか、変な噂の多いレオンと知り合いというのは、不思議だ。
ただそれを言ってしまうと、レオンはカノンが着てから明らかに自分を弱く見せる努力をしているが、レオンがあれほどの強さで無名というのもおかしな話だった。
未だにイオはレオンが本当は何者なのかを知らなかった。
そこで、かの勇者様、ホーリィロウがにこやかに告げた。
「その女装対決、僕も出ようかな？」

買出しから戻ってきたトランは部屋を開けて一言。
「誰もいない……」
その机の上に、書置きがある事に気づくのは、その３０秒後の事だった。

出遅れたでござる（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

ｗｅｂ拍手を更新したのでそちらもどうぞ

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

愛は全てを救う

フリフリの貴族が普段のパーティで着ていそうな豪華なレースのドレスを、ホーリィロウを着て、残念だが非常に似合っていた。
そんなホーリィロウに、若干引きつつレオンが問いかける。
「何でそんな服を持っているんだ？」
「行く先々で綺麗なお嬢様方に、『ぜひ、ぜひ、着て頂きたいです！、きゃー／／／／／』と言われてね」
「……その事に疑問は？」
「女性には優しく、が僕のモットーなんですよ？」
そうですか、さすがはモテる勇者様は違いますね、とぶつぶつと呟くレオン。
そこで、ホーリィロウの仲間である戦士が少し小さめの花の入った花瓶を持ってくる。
そして、そのままホーリィロウの頭に乗せた。
「……何をやっているんだ？」
「この前助けた、クレメンダ領のマリー、マリーアントワネットお嬢様からこのような花瓶を頭に乗せる髪型が流行っていると聞いたので試そうかと」
「やめろ、さすがにそれは無い」
「無いとは思ったけれど、そういう髪型も意外に面白いかなと僕は思うのだが？」
「……何で昔からそういうセンスだけは斜め上なんだろうな、お前は……」
いつも振り回す側のレオンが珍しく溜息を付く。
そこで、ホーリィロウの仲間の魔法使いが、
「あのー、前回もそうですが、レオン様？、は我等が勇者様とどのようなご関係で？」
それはイオも気になっていたので耳をそばだてて様子を見守る。

にやにやとホーリィロウは笑い、一方レオンは気まずそうに目を背けて、
「……前回が初対面だ」
「いえ、ですが……」
「ほら、魔法使い。レオン様がそう言っているのならばそうなのだろう」
さりげなく様付けで名前を呼ぶホーリィロウに、レオンは苦虫を潰したような顔をする。
残念とイオは小さく心の中で思った。しかし、レオンの素性が気になったが、いずれは分かるだろうとイオは楽観的に考えた。
そして、あまり会話したくないというかのように、レオンはカノンの傍に歩いていく。
心なしか憂鬱そうで、いつもの明るいレオンからは想像をつかない。
一方、未だカノンと僧侶のイータは、シャー、と相手を威嚇しあっていた。
そんなカノンをレオンは後ろからぎゅっと抱きしめる。
カノンが固まった。
「え、えっと……レオン？」
「ちょっとカノンを補給する」
そのままレオンはカノンの首筋に軽くキスをする。
カノンの顔が真っ赤になって、引き剥がそうかどうしようかとわたわたとしてから、そっと安心させるようにレオンの手に自分の手を重ねた。
しかしどちらも女装しているので、百合カップルのように見えると誰もが思った。と、
「レオン様！　僕だってレオン様を癒す事が出来ます！」
「……いや、一応僧侶だから、神様に仕える人にそういう事しちゃいけないだろ？」
「大丈夫です！　愛さえあれば、大抵の場合何とかなります！」

必死に抱きついてこようとする僧侶のイータを絶妙な距離に逃げつつ避けるレオン。すると、
「カノン……あれ、どうした？　肩を震わせて」
カノンが顔を上げ、満点の笑みを浮かべて、
「レオン……僕が、魔物とのハーフだからって、好きなように体を弄んで良い訳じゃないいんだからな！」
「別に、気持ち良くなかったんだから良いだろう？」
「気持ち……確かに、ちょっとレオンの体温が伝わって気持ちいかなと思ったけれど！　それとこれとは話は別だ！」
素で告げるカノンに、今度はレオンが気恥ずかしくなる。
珍しく頬を赤らめるレオンに、カノンは珍しいなと思いつつ見詰めていた。
そして取り残された僧侶イータが、そんな二人が気に食わないので何かを言おうとして、ホーリィロウに遮られた。
「それじゃあダンスをする組はくじ引きでいいかな？」

とりあえず全員が社交ダンスしか出来ない事が分かった。
「それで、俺とホーリィロウ、カノンと僧侶のイータになったわけだが……そこ、喧嘩するな」
再びカノンと僧侶のイータは、シャー、と相手を威嚇しあっていた。
そして言っても止める気配が無い。と、
「仕方がありませんね、では、レオン様が女性役という事で。僕は男性パートしか踊れませんから」
くるっと、カノンがこちらを向いた。微妙そうにレオンを見て、ホーリィロウを見て、再び何かいいたそうにレオンを見る。
レオンは自分が嵌められた事に気づいた。
「ホーリィロウ、そういうアピールの仕方はどうかと思う。俺を男役にさせろ」
「レオン様は女性パートしか踊られたことが無いはずですよね？」

「……知らん。カノンの前では、幾ら……」
「貴方様といえど、僕は仕えるべき主と獲物の区別は付けているつもりですので」
「……後悔するぞ？」
「実力で示せば構わないでしょう。そもそも、そちらの方の手腕も僕にはあることはお忘れで？」
「どっちも女装しているんだし、どちらのパートを踊ったとしてもアピールにはならないだろう？」
「ではこのままで構わないですね」
本当に扱いづらい、とレオンは心の中で思う。昔からこいつはそうだった。
そして本気でカノンを獲物として取りに来ている。
理由は、どれなのかが分からない。単純に見かけに惹かれただけなのか、別の理由があるのか。
そう、カノンが……。
レオンはホーリィロウの事を昔から知っている。
それ故に、彼がどれほど魅了に長けているのかを知っている。
取られたくない。
たった一つだけどうしても譲れないそれを奪われたなら、レオンは自分が狂うのではないかと思う。
ずっと焦がれて、追いかけて、けれど無理かもしれないと思いながら忘れられなかった彼。
そこで、カノンがレオンに近づいてきて、レオンの頬にキスをした。
自分からなんて珍しいとレオンは思っていると、そのままカノンは真剣な表情でにっと笑った。
「勝て、レオン」
短い言葉。けれど、それだけで十分だった。
レオンはホーリィロウに向き合って、自信を取り戻したかのように笑う。

「いいだろう、お前には負けない！」
そんな様子にホーリィロウは焼けますね、と呟いたのだった。

愛は全てを救う（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

気よつけて→気を付けて、ですね。指摘して頂きありがとうございましたｏｒｚ。本当に気が付けばそういう癖がついてた。いつ付いたんだろう……記憶に無い……。

また、この話を追記：すぴぱるにも投稿するかもです。

明後日から冬コミデスネ……私は体調不良で自宅待機です。遊びに行きたかったお。代わりに、連日更新できたらなと思っています。コミケで並んでいる間の暇つぶしにでもお楽しみくださいませ。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

思い通りにする方法（笑）

レオンとホーリィロウが踊りだした時、まわわりは騒然となった。とはいっても、ホーリィロウとレオンの仲間しかいなかったのだが。

ふわりと緩やかにスカートの舞う様も、本当にレオンの柔らかな美しさを引き立てている。

色々な意味で巧みに踊っていく二人。自然とカノンの目が険しくなる。

だがそれがレオンの踊りの技術の高さを示している。

けれど、これほどまで女性パートをレオンが上手く踊りきっている事に、カノンは面白くないものを感じた。

二人が上手いと余計にそれを感じる。

「やはり我等が勇者ホーリィロウ様は素晴らしい。文武両道、そしてあの容姿……どれをとっても完璧な方で、しかもこのように踊りも上手いなんて！あ、でもレオン様も本当に綺麗ですね……周りに光のかけらが振りまかれているように煌びやかで……ああ、くらくらする」

目を輝かせながら、アイドルを見て騒ぐファンのようなその様子の僧侶イータを見て、カノンは自分が彼に抱いている嫌なものの正体が、もしかしたなら違うんじゃないかな？、という事に気付いた。

なので、楽しそうな僧侶イータを少し観測してからカノンは口を開いた。

「……僧侶イータ。僕は今のお前の発言で何か色々と間違えている気がしてきた」

「む、可愛いだけの貴方に何が分かると言うんですか」

「……喧嘩を売っているのか？　僕に」

「売ってるんですよ、僕は。言わせないでください、恥ずかしい」

カノンと僧侶のイータは、シャー、と相手への威嚇を再び始めたのだった。

視界の端で、カノンと僧侶イータが喧嘩しているのをレオンは確認した。
あの二人、その不和の原因がレオンだと言うのは別に良い。
それだけカノンがレオンの事を気にしている、という事なのだから。
少しレオンはにやけていたのかもしれない。それに気付いたホーリィロウが、周りには届かない程度の小声で、
「やけに嬉しそうですね」
「ああ、カノンが俺の事を気にしているみたいだからね。さっきは勇気付けてくれたし、自分からキスもしてくれたし」
「僕は惚気られているのかなっ……と」
そう右足を踏まれそうになったレオンは巧みに交わして、踊りながら小さな声で会話を続ける。
「さっきから、わざと俺が踊りにくいように動いているのは酷いんじゃないか？」
「カノン君が見ているのだから僕も少し本気を出そうかなと」
「そういった相手を貶めて自分を良く見せようとする方法でなく、自身の動きで魅せようと思わないのか？」
「足を引っ張る方が楽なのですよ？」
「自分で成長する方が大切だろう？」
「レオン様は、心が強いですね」
「お前は実力で押していくほうだと思っていたが？」
「さて、何のことでしょう。……それにこの程度の嫌がらせは、分かりにくいようにやるものです。現に、誰も気付いていないでしょう？」
そう、ちらりと回りの様子を見るホーリィロウ。
カノンとホーリィロウの目が合うと、カノンの目がすっと細くなり、声を出さずに口を動かす。
”セイセイドウドウショウブシロ”

カノンにはばれていた。
「どうしよう、本命のカノン君に気付かれてしまった。……彼、魔物なのに、人の踊りが分かるんですね」
魔物だと言うホーリィロウにレオンは訂正を入れる。
「……カノンは魔物とのハーフだ。それにカノンは、抜けているけれど、本当は強くて賢いよ。もっとも踊りは昔、俺がカノンに教えたけれどね」
「……レオン様、カノン君と幼い時に？」
レオンは口を滑らせたと舌打ちする。
こっそり昔カノンに会いに行っていた事など、出来るだけ知られないようにしないといけなかったのに。
つい、ホーリィロウに張り合って、あまり知られたくない情報をしゃべってしまった。
「そうですか、やけにカノン君に執着すると思っていましたがそのような……けれど、彼は魔物でしょう？」
「”幼馴染”　だから何かを教えあう事もあるだろう？」
「あの姿の人間で不審な人物と接触したという話は、僕もレオン様と古い付き合いですが聞いた事が無いですね？」
「……カノンとは、俺が子供の時からの幼馴染だ」
「レオン様はそれを本気で言っているのですか？」
今度は探るようにレオンから言葉を引き出そうとするホーリィロウ。
確かにその辺は彼ならば気になるだろう。
だが、記憶操作されていると誤解されている方が都合が良い場合がある。今回はそうだ。
「子供の時のカノンは本当に可愛かったぞ？　本当に可愛らしくて神々しい子供だった」
「……羨ましいですね。そして、カノン君は貴方に惹かれていると？」
「さっきの行動で察して欲しいな」

珍しく真剣に、ホーリィロウは悩む表情をレオンに見せた。そして、
「……僕も幾つか考えなければいけないようです」
大体ホーリィロウが言いたい事がレオンは分かったのでけん制しておく。
記憶操作されているのなら、そんな状況ではカノンと一緒にいさせるのは危険だからとレオンは連れ戻されてしまうだろう。
特に、ただでさえ無理を通している今の状況では、良い口実になってしまう。
例えレオンがカノンを抑えている側面があったとしても。
レオンは……だから。
それにレオンはまだカノンを手に入れていない。良いとは言えない奇跡のような偶然とはいえ、一緒に旅が出来ているのだからこの機会をレオンは逃したくはなかった。だから、
「今俺をカノンから引き離すと、カノンは助けに来るだろうなー」
「……それは遠まわしな脅しですか？　はあ、しばらく様子見ですね……」
「そのままカノンの事を諦めてくれると俺は嬉しい」
「僕は彼を獲物と決めましたから。例えレオン様でも譲れません」
きっぱりと言い切った所で、踊りを二人は終えたのだった。

思い通りにする方法（笑）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次の更新は、１２／２９　午前６：００頃出来たらいいなと思っていたりします。間に合わなかったらごめんなさい。

よろしくお願いいたします

奴も男だ

踊り終わった途端に、レオンはカノンへと走りより抱きつこうとする。
だがさっとカノンは避けた。盛大に転ぶように、レオンが転ぶ。
レオンが恨めしそうな声を上げた。
「カノン、抱きとめてくれたって良いじゃないか」
「レオンの方が背丈も体格も大きいのに、抱きとめられない。そもそも、そんな事をしたら僕が床に倒れて痛い思いをするじゃないか」
「がんばった俺にご褒美としてそれくらい良いじゃないか」
「わかった。じゃあ僕がレオンに抱き付けばいいんだね？」
そう言ってカノンはレオンに抱きつくという名の、飛込みをしようとした所で襟首を掴まれた。
「使用人、レオン様は戦利品だ。どっちが勝つかで、決まるんだ。分かってる？」
「使用人言うな！　それにレオンは今はそちらのものではないから、僕がレオンに抱きつくのは問題ないね。そもそも、渡す気も無いけれど」
「ふん、約束は守ってよね、カノン」
「そもそも今ので、僕達の勝ちがまず一つ決まった。そうだろう、ホーリィロウ」
「……聞こえていたのですか？」
困ったように笑うホーリィロウに、カノンはつまらなそうに続けた。
「少し魔法を使って会話を聞かせてもらっていた。お前が、レオンが踊りにくいよう仕掛けているのが分かったから」
「そうですか、これは貴方に嫌われてしまいますね」
「元々何とも思っていない。そしてこれからも」
冷たく言い放つカノンに、ホーリィロウは戸惑ったように目を瞬

かせた。
「僕には一切興味が無いと？」
「自意識過剰なのでは？」
ホーリィロウが本当に困ったような表情をする。
それはそうだろう、とレオンは納得する。昔から多くの人間を魅了し、羨望の眼差しを受けていた彼が眼中に無いと言われたのだから。
「これは難しい問題に当ってしまいましたね……少し気長にやっていきますか」
「何の話だ？」
問いかけるカノンに、ホーリィロウは少しじっとカノンを見て何かいいたそうにしながらも、僧侶のイータに視線を移して、
「いえ、それでは今回は僕の負け。イータ、がんばってください」
「はい、ホーリィロウ様……よし、いくぞ」
やけに張り切るイータに、こんなずるい奴にどうして付いて行くのか、とカノンは心の中で疑問に思ったのだった。

「じゃあ僕が女性パート、使用人が男性パートでいいね」
やけに偉そうな僧侶イータに、カノンは何処か面倒そうに、
「僕は使用人じゃないと、何度言ったら分かるんだ。この鶏頭、三歩歩いて忘れるのも大概にしろ！」
「アーアー聞こえないー。……でも、レオン様をくれたら、カノンってきちんと呼んであげる」
「全力でお断りする！」
「交渉決裂だね。早速、いきますか！」
そう、僧侶イータと向かい合ってカノンは思い出す。
そういえば人の踊りは、子供に化けていた時の金髪の少年に教わったのだ。
設定上同い年の少年はカノンよりも背が低く若干力も弱かった。
確か、勝った方が一つだけ言う事を聞く、という約束で教えても

らったのだ。
カノンが男役で彼が女役。
そういえば、やけにあの時かの少年が顔を赤らめていた気がするが、まあいい。
「それではよろしく」
そこでカノンは恭しく、僧侶のイータの手の甲にキスをした。
全員が固まった。
そしてレオンは嫌な予感と共に昔の記憶を思い出す。
男性パートを教えたとはいえ、今なら分かる。彼は魔族の王。
故に王としての威厳も、雰囲気も持っているのだと。
現に、その洗練された、いつもの可愛さや甘さがなりを潜めた堂々とした自信に満ち溢れた姿は、まさしく”王”そのものだった。
その様子に幼いレオンはどきどきすると共に悔しさを覚えていた。あの時から既にレオンは、カノンの事をお嫁さんにしたいと思っていたから。
そのまま呆然とする僧侶イータを抱き寄せて、踊りの形にする。
そしてふっと微笑みかけると、僧侶イータがこれでもかというくらい顔を赤らめた。
レオンはとてつもない不安を覚えてホーリィロウを見ると、彼も似たような表情をしていた。ついでに僧侶に思慕を寄せている戦士を見ると、完全に凍り付いていた。
そのまま踊りだす二人。
どちらも非常に良いのだが、何となく僧侶が恋する乙女のようにカノンを見ているのは気のせいか。
そしてその懸念は当る。
踊りが終わった途端、僧侶イータがカノンに抱きついた。
「抱いて☆」
即座にレオンとホーリィロウが二人を引き剥がした。そこで、僧侶イータが抗議の声を上げた。
「ホーリィロウ様、綺麗だと思ったから抱きついただけなのに、酷

いです」
「僧侶イータ、都市で、綺麗な男を次から次へと追い掛け回して、謹慎になったでしょう？　そもそも、この旅で、少しでもその行動的な面食いの性格を直そうと、大人しくしていたのではないですか？」
「……忘れてた」
「……いえ、僕の責任でもあります。レオン様と接触させた事が間違いだった」
「いや―、レオン様も好き！　それにカノン様も好き！」
カノンが気味の悪いものを見たかのように、一方後ろに下がった。
そこで背後にいたレオンに当る。
見上げるように見ると、レオンがそのまま腕を前に回してカノンに抱き呟いた。
「カノンは可愛い”幼馴染”でいてくれ。でないと……」
やけに真剣な表情をしたレオンが続きを言おうとして、そこで部屋のドアが開いた。
「ここか！」
トランが、顔を真っ青にして飛び込んできたのだった。

奴も男だ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次の更新は、不明ですがよろしくお願いいたします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0618z/

戦う魔王様!？

2011年12月29日06時51分発行